

の意にも。通_レしてよめが。萬葉に_レとといへるをさく見えず。九の巻に「まつがへりまひにておれやと云ふなどあるのみ也。八の巻に「おもやと見えんとあるの文字のあやまりと見ゆ。

○ばや

古四 天の川紅葉を橋にわたせ_レばや_レたなばたつめの秋をしもまつ

同 久かたの月のかつらも秋となは紅葉すれ_レばや_レてりまさるらん

同十二 夕さればはたるよりけにもゆれども光見ね_レばや_レ人のつれなき

後九 塩みたぬ海とさけ_レばや_レよとよに見るめあくして年のへぬらん

古十二 思ひつゝぬれ_レばや_レ人の見えつらん_二夢とまりせばさめざらましを

右のどとくなるばや_レのみなば_レあやといふ意也。また

千十三 くれなるにまをれし袖もくちとてぬあら_レばや_レ人に色も見すべき

万十一 ころもしもおほくあらなんどりかへてきな_レばや_レ君が面わすれたらん

六帖 秋の夜の千夜を一よになすらへて八千夜しね_レばや_レあく時のあらん

古一 心あてにをら_レばや_レをらん_二初霜のおきまどりせるまら菊の花

續後三八 條時高倉 さまもあへず枝にわかるくさくら花いと_レばや_レまらん_二おもふころも

高内侍集 ほかにも見_レばや_レなぐさむと思ひし心をまらぬころなりけり

右の如くなるばや_レの。やもじを下の語の切る所へうつして。かにかへて見れば。よく聞ゆる也。あらばや人に色も見すべきの「あらば人に色も見すべきか也。きなばや君が面わすれたらん」きなば君が面わすれたらんか也。八千夜しねばやあく時のあらん「八千夜しねばあくとき」のあらんか也。「をらばやをらん」をらばをらんか也。「いとやまらん」いとやまらんか也。「見ばやなぐさむ」見ばあぐさむか也皆かくのどとく心得て其意明らか也○新古今十八西行「いかすべき世にあらばやとよをもすていあなうの世やとさらに思はん。是の世にあらばといひて。やとの「あわれなといふやうの歎息の辭也。されど此辭の歌に例なく。聞よからず。西行歌に此外もあり。又新千載「袖ふれてをらばやをらんわきもすがすそひく庭にはふ梅がえ。これ右に引る古今集の歌をわしく心得て誤れる也。此歌にて「をらばやどのみにてよろしさを。下の「をらんとといふ詞あまれり。又新後拾遺九「いにしへも今

もわらばやわがごとく思ひつさせぬわかれする人。これのめやをばやと
寫しあやまれるなるべし

○右の外に願ふ意のばやあり。下の雜やの部に出せり

○めや

めやと めやも ちめや

すべてめんのとたらける辭にて。めやのんやとの意也。いづれも意のうら
へかへるときに用ふ。

古五

うゑしうゑば秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへかれ **めや**

同十三

さゝのそにたく初霜のよを寒みまみにつくとも色にいで **めや**

同十二

秋なれば山とよむまで鳴鹿にわれおとら **めや** 獨ぬる夜と

同十五

こ **めや** とは思ふものからひぐらしの鳴夕ぐれはたちまたれつと

新拾一

散そむる花を見すて、かへら **めや** おぼつかなしと妹とまつ共

古三

わすれ **めや** わふひを草に引むすびかりねの野への露のわけほの

古一

たねしあれば岩にも松とおひにけりこひをしこひばあにざら **めやと**

同十四

みよしの、大河の邊の藤なみのなみにおもと **めやと**

後十二

けふそへにくれざら **めやと** と思へともたへぬと人のこゝろなりけり

古墨滅

山しなの音羽のたきの音にだに人のゑるべくわがこひ **めやも**

續古十二

わだ波の高師のたまのそなれ松なれずばかけてわがこひ **めやも**

新定家卿

今さらば雪ふら **めやも** かげろふのもゆる春日と成にしものを

後十八

めやも 萬葉にいとおほしめやと同意也万葉にめやとといへるは
いとつもなし

古十二

津の國のなにはのあしのめもてるにまげさわが戀人ゑる **らめや**

後拾十二

あし引の山下とよみなくとりもわがぶとたえす物おもふ **らめや**

後拾十二

ゑる **らめや** 身こそ人めをとかりの關になみだりとまらざりけり

後拾十二

らめやのらんやとの意なり

○れや

五くさ

古四

秋の野におくまら露と玉な **れや** つらぬきかくる脚のいとすぢ

古 里のあれて人ふりにしやとな^一れや^二庭もまがさも秋の野らなる^三
 同 四 くべきはとどきすぎぬ^一れや^二待わびて鳴なる聲の人をとよむる^三
 同 十 いせの海おつりする海人のうけな^一れや^二心ひとつを定めかねつる^三
 同 十二 うき草のうへとえげれる淵な^一れや^二深きころをえる人のなき^三
 同 十五 わが戀とみ山がくれのくさな^一れや^二えげさまされとえる人のなき^三
 同 十七 すまのあまの鹽やき衣のをさをあらみまどはにあ^一れや^二君がさまさぬ^三
 同 十八 咲そめし時より後とうちとへて世の春な^一れや^二色のつねなる^三
 同 八 水のおもにおふるさ月のうき草のうき事わ^一れや^二ねを絶てこぬ^三
 同 五 ひぐらしの聲さく山のちかけ^一れや^二鳴つるなへに入日さすらん^三
 同 八 天の川冬はこほりにとぢた^一れや^二岩間にたぎつ音だにもせぬ^三
 同 十七 えら雲のさやどる峯の小まつ原枝まげ^一れや^二日の光見ぬ^三
 千 十一 ねばつかなうるまのしまの人な^一れや^二わが言の葉をえらずがはなる^三
 右のれやの皆ればにやといふ意也。然るにそのにを略さてればやといへ

る例也。外にもつねにおほきを。又そのばをも略さてれやといへる例も
 萬葉にの外にもつねにおほし。ゆけばやをゆけやといひ。思へばやを思
 へやといへるたぐひ是也。さて此れやの語切れず下へつゝきて。とぢめ
 の皆やの結びなり。

古十九
せきう歌

春されば野べにまづさく見れどあかね花まひなしに
 只なのるべき花の名な^一れや^二

同 十一

源氏
さあらいひ

思ふともこふともあそんものな^一れや^二「ゆふてもたゆくどくる下ひも
 えはたるゝ海士のころもにこと奇^一れや^二「うきたる波にぬるゝわが袖

右のれやの皆りやとといふ意にて。花の名なれやの「花の名なりやと只
 なのるべき花の名にのあらずとやうに。意のうらへかへるてにをこ也。
 皆これになすらへてささるべし。此格のれや萬葉にの猶おほし。七の巻
 古風の部に出せり。さて此れやのみな切るゝ辭にて。下のとぢめやに
 かゝりらす

古 十三

後 十二

風ふけば波うつ峯のまつな^一れや^二「根にあらりれてなきぬべらなり
 うつゝにもあらぬこゝろのゆめな^一れや^二「見てもとかきき物をおもへば

後十五

拾六

後拾一

同十五

金九

詞七

同

同

千十七

新十

同十五

新勅一

管万下

六帖

ひるさ[れや] 見どまがへつる月影をけふとやいとん昨日とやいとん

わかれぢは戀しき人のふみな[れや] やがてのみこそ見まほしけれ

みつしほのひるまだになき浦な[れや] 通ふ千鳥の跡も見えぬと

川かみやあらふの池のうきぬなとらき事あ[れや] くる人もなし

世中はうき身にそへるかけな[れや] 思ひすつれととなれざりけり

影見えぬ君とあま夜の月な[れや] 出ても人にまられざりけり

わが戀こよし野の山の奥な[れや] かもひいれ共あふ人もなし

むねのふじ袖と清見が關な[れや] けふりも波もたぬ日ぞなき

跡たえてよをのがるべきみちあ[れや] 岩さへ苔の衣きにけり

あけば又こゆべきやまの峯な[れや] 空行月の末のまら雲

やとらぐるひかりにあまる影な[れや] いすい川原の秋のよの月

花な[れや] 外山の春の朝ぼらけあらしあかをる峯の白くも

わが身をばひとつ朽木になした[れや] ちやの春にもあへるかひあし

あだ人のこゝろと空の神な[れや] 雲おにのみもなりまざる哉

右のれやの皆りやと疑ふ意也。さて皆切るやにてとぢめりやの結びに

かゝりらす。さて右の内ふ。ればにやの意なるとまがひて聞ゆるがおほ

けれ共。ればにやの意なるを。下へつゝきて。必やの結びにてとぢむる

を。此りやの意なるの。切れて。下のやの結びにあらず。これをもて分

つべし。萬葉十に「もししきの大宮人といとまわれや梅をかざしてこゝ

はつとへる。これのいとまわれはにやの意にて。切れざる故に。留りや

の結びなり。然るを朗詠集又新古今に下句を「さくらかざしてけふも

くらしつ改めて入られたり。此時と「いとまわりやといふ意にて。やに

て切る也。故に留りやにかゝはらずこれとぢめの辞あて分つべしよ

くせずばまがひなん

たがために引てさらせる布な[れや] よをへて見れととる人もなき

あれにけりあれいくよの宿な[れや] すみけん人の音づれもせぬ

春くれば瀧のまら糸いかな[れや] むすべ共猶沫に見ゆらん

さそしかのつまとふ聲もいかな[れや] ゆふべり分てかなしかるらん

新勅 五

ころもうつひいきの月のなにな れや さえゆくまゝにすみのぼるらん
右のれやと皆。上にたがいく何なといふ詞をおきて。下をその結びにて
とぢめたる中間にあり。やもじをばよかへて見れば心得やすし

後 十九

草まくらゆふてばかりはなにな れや 露も涙もおきかへりつゝ

後集 十二

程もなくこふるころとなにな れや 空に過にし秋のみや入

新 八

神無月まぐるころもいかな れや 空に過にし秋のみや入

同 十七

山かげにすまぬころといかな れや 空に過にし秋のみや入

右のれやの皆。上に何なといふ詞有て。やにて切る也。故に下何や
の結びにかゝりらす。さて此「なになれや」なにあるぞ也。「いかなれ
や」いかなるぞといふ意也

右五くさのれや。皆同じ辭の格にて。意のわく異也。よくせずばまがひ
ぬべし。又切るもと切れさるるによりて。留りもやを受るとうけさるるの
かり有。よくわきまふべし

○右の外には歎息のやにもくさくさのれやあり下に出せり

○やぞ

後 九

はかなくて同じころに成にしをおもふがごとのおもふらん やぞ

此留の留り信明家集にやぞとあり
中務集にやぞとあり

拾 三

年にありて一夜寐にあふ彦星も我にまさりて思ふらん やぞ

晴 三

世中をよかなさものとみささのうもる山になげくらん やぞ

同

宿見ればよもぎの門もさしながら有べきものとおもひけん やぞ

兼 盛

澤水にれいぬる影を見るたづの鳴音雲にさこゆらん やぞ

好 思

夏ぎぬの有しながらも冬の夜をせなとしねなば寒からん やぞ

同

よの中をうしどかいこゝかた時もありへなん やぞ 忍ふればこそ

此やぞといふとわ。萬葉古今などにも見えず。又後拾遺よりこなたの集
にもすべて見えず。さくよくもあらぬ辭なり

○やぞいひてとすらんと結ぶ格

後 十九

もみぢ葉をぬさとたひけてちらしつゝ秋と共に やゆかんとすらん

此例の歌となは六の巻らんの部にあまた出せり

○やらん

千五百番

谷がくれ木葉が下ののうもれ水こほればやらんおどづれもせぬ

夫木 慈鎮

春の野にふて手にかけてゆくまづのたゞなどやらん物あわれなる

すべてやらんといふといやしき辞にて。歌にも文にもふるく見ぬす。今の世の人これをよき詞と思ふとひが心得也。右の千五百番の歌合の歌も。むげにをさなしと難せられたり。

とじめよりこれまでこの條よりみな疑ひのやなり

○歎息のやなげきなげきとい。後世にいたうれひかなしむ事にもみいふめれど。さにあらず。うれしきにもれもしろきにもあわれなるにもわたりて。すべて心に深く感せらるゝ時に長く息をつく事也。さて此やとその歎息の聲なる故に。今かりに歎息のやといひて事をわかつてり

古 十一

あしがものさわぐ入江のえら波のえらすや人をかくこひんどの

同 十九

思へどもおもえずとのみいふなれいなや思ひじおもふかひなし

後 十八

よの中はいかにやいかに風の音をさくにも今の物やかなしき

拾 六

をしむともかたしやわかれ心なるなみだをだにもえやいとむる

後拾 十六

ねぬなはのねぬ名のいたく立ぬればなは大澤のいけらじやよに

金 八

音にさく高師の濱のあだ波こかけじや袖のぬれもこそすれ

新 二

うらみずやうさよを花のいとひつゝさそふ風あらんと思ひけるをば

同 三

さかでたいねなまし物をほとゝぎす中となりやよばの一聲

同 八

あわれなるわが身のとてや浅みどりつひにの野への霞とおもへば

同 十

人をなほうらみつべしや都鳥ありやとたにもとふをさかねば

古 廿

かひが根をねこし山こし吹風を人にもがもやことつてやらん

万 五

あまどふや鳥にもがもやみやこまでなくくりまをしてとびかへるもの

金 七

池にすむわか名をいしのとりかへす物にもがなや人をうらみじ

狭衣 七

あさりする海士ともがなわたつ海の底の玉藻もかつき見るべく

後 十五

えら川のたさのいと見まはしけれとみだりに人をよせじ物を

伴の歌共のやみな歎息のやにて。これを除きても意の同じことなれ共。此もじにてその情深くある也。或はよ或はななどに通ひ。又かなといふ意にも通へり。右の外古今二「なげや鶯。同三」やよやまで。後拾遺三「いそげやさなへ。詞花三」そいや秋風。なごのや。又いそや「いそや「よしやの類。又「こかなしや「ことわりや「かひなしや「あさましや「めづらしや「わりなしや「うらめしや「くるしやなどの類のやもみな同じ。萬葉にも十の巻に「本つ人はとゝぎすをや。此をやのよやといふに同じくて。同じ歎息のや也。又十二に「わぎもこや。十六に「だんをちや。十九に「ゆめよるな人やなどいへる皆同じ又一つの格

後拾
十二

いかにせんあなわやにくの春の日やよはのけしきのからましかば
花うるしこやぬる人のなかりけるあなとらぐろの君がこゝろや

金
八

千
三

五月雨とまのまづくに袖ぬれてあなまはたれの波のうきねや
これらの上にあなといひのと受てやと結び。これも歎息のやなり

また

六帖

玉だすきかけねばくるしかけたればあなわづらひし人のこゝろや

此歌の中にのもしなく又「わづらひしにて語切る、故によくもどいのかず。また

詞
十

朝なく鹿のまがらひ萩がえの末葉の露のありがたのよや

新
十五

あふと見てことぞ共なく明にけりこかなの夢のおすれかたみや

同
十六

れのが波に同じ末葉をまをれぬる藤さく田子の恨めしの身や

同
十

ふしわびぬまの、小篠のかりまくらこかなの露や一夜ばかりに

これらにあなといふす。たゞのどのみいひて。やと結び。但しのを二つたゝみたるがおほき也

〇とや

此のわの如くよむ也

拾
六

君がすむやどのこすゑのゆくくとかくるゝまでにかへり見しとや

六百番
願昭

夜川たつ五月さぬらしせをとめ八十ともをもかぐりさすはや

此とやといと古き辭にて。古事記日本記に倭建、命の御詞に「わづまこや

と見え。其外もこれかれおほし。七の巻古風部に出せり。又源氏物語な
どの文にもおほし。それを者也と釋せるのあたらぬとあり。

〇れや

後十六

世中うはさむのなれや 〇人言のどにもかくにもきこえぐるしき

詞九

あだ人たまぐるよの月なれや 〇すむとてえこそ頼むまじけれ

千十一

あら磯のいこにくだくる波なれや 〇つれあき人にかくるこころを

新

雨ふれば小田のますらをいとまわれや 〇苗代水を空あまかせて

同六

津の國のなにとの春のゆめなれや 〇あしの枯葉に風わたる也

同十三

有明ともひ出あれや 〇よこ雲のたよりれつるまのゝめの空

六帖

わが戀をそなる星のかきなれや 〇人にえられで年のへぬれば

同いせ物語

秋の夜と春日わするものなれや 〇かすみ霧やちへまざるらん

これら「なれや」「なりといふに歎息のやを添たる意」「あれや」「あり
といふに同やを添たる意にて」「なれや」「なるかな」「あれやと」「あるか
なの意にかよへり

後拾三

ありあけの月だにあれや 〇ほととぎすたゞ一ころのゆく方も見ん

新勅十二
隆季卿

逢坂の關のせきもりこゝろあれや 〇岩間の清水影をだに見ん

續古十六
朝忠卿

夢かどぞわびていおもふたまさかにとふ人あれや 〇又やさむると

これらの「あれや」「あれと願ふ言に。歎息のやを添たるにて。」「あれな
どなを添るに同じ。此「あれや萬葉にも見ゆ。七の巻古風部に出せり

新勅五
後京極

ひとりねのよさむになれる月見れば時しもあれや 〇衣うつ聲

堀川
後百首

時しもあれや 〇みなぶら山を朝ゆけばこのもかのもにかとづ鳴なり

これらの「時しもあれと常にいふ言なるに。歎息のやを添たる也。堀川
後百首の歌の。やもじなくて調べよろしきを。いかすればわづらひしく
添たりけん。いと心得ず。これを夫木集に「時もあれやと有り。これも
わろし〇堀川百首に「こころをこころす物なれや思ひぬ人を何思ひ
けん。是のこその結びになれといへる下へやを添たり。とこのへり共聞
えず。

すべてなれやあれやなどいへるれやの。疑ひのやなるもくさく有りて。上

にわけたるが如し。又歎息のやなるも右のごとく種々あり。いとまぎれやすし。れのく其歌の意をよく味ひてわきまふべき也。

○ぞや 三の巻の部に合せり

○かや 四の巻の部に合せり

これまでの條のみな歎息のやなりいづれも下の結びとやにかいりるごなし

●雑のや

○一つのや

「すがのらや伏見の里」「大原やをしほの山」「かづらさや高間の山

「さらまなや姨すて山」「さくなみやまがの浦

これらのたぐひと。地名を重ねいふ時に。中にれくやにて。のといふに通へり。これと上と下との地名別所なるを。二つをらべいふにあらす。上なるの廣くして。下なると其中にある地名也。然るに「かづらさや高間の山なごを。」かづらさと「たかまご二所と心得るのひがと也。葛城の内にある高間山也。○古遺十二「かづらさや我や久米の橋つくり云々。これに「我や」といふ詞をへだてて「久米へかゝれり。めづらし

また

「あふ坂や」「いせの海や」「まがのうらや」「なにと江や

かくのみいひて下へ地名を重ねざるもつねのとなり。また

「まき島ややまと」おして「や難波」「神風やいせ

此たぐひと。上の枕詞にて下の地名也。古風にも「さひづるやから」あまごぶやかるなごよめり。但し千五百番歌合に「たまはこや」「ものいふや」などよめるをば難せられたり。まごにこれら聞よからずかし。又

「柳葉や」同「ゆふまでや」新「さむしろや」同「天の戸や」

「萩の葉や」また「にはてるや」「山陰や」「柚山や」「浅茅生や

此たぐひいとおほし

○のや 三の巻の部に合せり

○一つのや

「なにと津にさくや」この花 同「はとゝきすなくや」さ月の

「夕月夜さすや」岡べの 拾「なはをなみねるや」ねりその

新二

「柴の戸をさすや」日影の

同五

「きりくすなくや」霜夜の

新勅十三

「ゆふなきにやくやもしほの

此たぐひ猶いとおほし

新三

れのがつまこひつゝなくや五月やみ神なみ山の山はとくぎす

玉六
定家卿

あともなき末野の竹の雪をれにかすむやけぶり人と住けり

後二

これらのやも上なると同じとながらいさゝかいひさまかかれり。また

拾二

花ちるといとひし物をなつ衣たつやおそきと風をまつ哉

後拾一

春霞たつやれそきと山川のいとまをくゝる音さこゆなり

此やのものと疑ひのやにて。夏衣をたつがれそき歌と疑ふばかりまぢかねたるやうに。いつしかとや風をまつといふ意也。春霞の歌もその意也。故に下をやの結びにさといひてと受たり。然れども此やのいと軽く聞えて。うちまかせて疑ひ共さきが如くなる故に。まばらくこゝに出せり

○物二つの間にとさむや

風十七
藤原惟規

なにとなく花や紅葉を見る程に春と秋といいくめぐりしつ

此歌の外に「花や紅葉とよめると。撰集に玉葉十九に光俊朝臣の歌。

又風雅入に後鳥羽院御製などあるのみにて。外に「見えす。撰集の外に頼政卿集小侍従が歌に。雪とだに見るべき花のなとやさみ雨やみぞれとふらんとすらん。又詞に大鏡に。歌や詩などを云。又「忠岑や躬恒あど云。童蒙抄に「久かたの月や空あどをこそよめれ云。などあり。すべて此やと。今の世に「あまねくよむ事なれ共。ふるき歌にをさく見えす。いやしげなる辭也。○枕冊子に「み奇人な花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞまけりける。源氏物語などにも「花やてふやといふとあり。これに「花よてふよといふに同じくて歎息のやなり。故に下の蝶にもいへり。語のいひさまも異なり。思ひまがふべからず。又上に出せる「かづらさや高間の山などを。此「花や紅葉などのやと同じ格と心得るもひがこなり。

○ばや
これのかくあらまほしと願ふ辭也

古三

さ月こばなきもふりなん郭公まだしきはどの聲をさかばや

後三

あたらよの月と花とを同じくいあわれまれらん人に見せばや

後拾一

こゝろあらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを

同十一

霜がれの冬野にたてるむらすきはのめかざばやおもふこゝろを

同 十四 わが袖を秋の草葉にくらべ **ばや** いうれか露のおきりまざるぞ

金 七 よどいもに玉ちる床のすがまくら見せ **ばや** 人によりのけしきぞ

右の外「まらせばや」「もらさばや」など猶ねはし。又

「見せ **ばや** な」「さか **ばや** な」「いと **ばや** な」「とと **ばや** な」「ゆか **ばや** な」

右のごとく下になを添てもいへり。また

「見せな **ばや**」「やみな **ばや**」「いりな **ばや**」

かくのごとくなを上にもれけり。但し下に添るなど。上におくなど同
じからぞ。そのたがひの五の卷なの部にくのしくいへり

右條の雜のやなり。いづれも切る、故に下の結びにいかへらす

も

すべてかこやに似たる辭にて。やと通ひしいひてよき所もねはし。故に萬葉にや
といふべき所をかといへる事ははし。されど又かならずやといふべき所ぞ。必かとい
ふべき所ぞ。たしかに分れたるも多し。みだりにむつかひがたし。

古 十 みよし野のよしの、瀧にうかび出る沫を **か**玉のきゆと見つらん

新勅 四 万八 あすか川ゆき、の岡の秋萩とけふふる雨にちり **か** 道なん

同 ふるさとの本あらの小萩いたづらに見る人なしにさき **か** ちるらん

源氏 明石 おもふらんころのはとややよいかにまだ見ぬ人のさ **か** なやまん

古 十一 れく山の菅のこまのさふる雪のけぬと **か** いとん **か** 戀のまげさむ

千 六 いもがりとさはの川邊を分ゆけばさよ **か** 更ぬる **か** 千鳥なく也

新 二 かとづなく神なみ河に影見えて今 **か** 咲らん **か** 山ぶさの花

新勅 十二 いたづらにいと年波のこえぬらんだため **か** おさし **か** 末の松山

源氏 寄生 よそへてぞ見るべかりける白露のちぎり **か** おさし **か** 朝貞の花

又 右の歌共のかこ。語のなかばに在て。やに通ひて。結びもやの格に同じ

後 八 物おもふと過る月日もまらぬまに今年もけふにこてぬと **か** さく

新 五 いつのまに紅葉しぬらん山ぞくらさのふ **か** 花のちるを、しみし

同十七

世をそむくところかきくかおく山の物思ひにぞ入べかりける

右の歌共のかと。結びのやの格に同じくて。やにか通かすかかもかとをかやら

んとか譯して聞ゆる也。また

拾十一

命をばあふにかふとかきくかしかどわれやためしにおそぬまにせん

同十九

あふみにかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼

同十九

みゆきとかよにかふかせて今かたかこず糸の櫻ちらすなりけり

これらのかもかやらの意なるとの上に同じくて。結びをたしかに結ばす

古十五

○切るか語のどぢめにおくかなり

同十七

夕されば人なきとこをうちとらひなげかんためとなれる我身か

同十七

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのまづくか

同十八

世中はむかしよりやとうかりけんわが身ひとつのためになれるか

後十七

わがためにをさかくかりしとし鷹の人の手にありとさくかのまか

拾十七

水のおもにやとれる月ののどけきりなみゐて人のねぬよなればか

古五

秋の月山べさやかにてらせるをれつる紅葉の敷を見よとか

同五

かれる田におふるひつちのはに田ぬかよを今さらにあきとてぬとか

萬葉にか「らんか」なんかかかさかといへる留り多しその例之古今集よりこな

たにか見えず拾遺八に「壺みつらんか」かなかさかあるか萬葉の歌なり

古二

春雨のふるいなみだか「さくら花ちるをか」しまぬ人しなければ

同四

秋の野の草のたもとか「花すか」さはかはかに出てまねく袖と見ゆらん

後十

わが袖か名にたつ末のまつ山か「空より浪のこえぬ日か」なし

詞八

御から野かまばしかのこひかりさかもあらばあれそりとてぬか「やかたをの鷹

後拾四

明ぬるか「川瀬の霧のたえか」にかをちかた人のそての見ゆるは

新十四

絶ぬるか「影だに見えばとふべきをか」かたみの水はみくさるにけり

新五

又新古今のころの句の半にもおける歌ははし。花やかなるものなり

同五

さうかくす夜寒に秋のなるまかによわるか「聲のどはか」かりゆく

同五

あけぼのや河瀬の波のたかせ船くかだすか「人の袖の秋か」きり

新六 うつりゆく雲に嵐の聲すなりちるか「まさきのかづらさの山

同十七 我ながら思ふか「物をとばかりに袖にしぐるゝ庭のまつ風

此歌なごの詞を下上にうちかへしたる故にいよく花やか也。又

同十五 ゆめか「見し面影も契りしもわすれせながらうつゝならねば

此かも切るゝかなるを下へとよといふ辭を添たり。また

同四 月をなほまつらんものか「むら雨のこれゆく空の末のさと人

これかも「といふ言ふ意なしたゞ「まつらんかといふ意也。また

同八 いらせ物語 しら玉か「なにぞと人のとひし時露とこたへてけなまし物を

かくもよめり

すべて語のとぢめにおきて切るゝかの上と。つゞく格の辭より受る定まり也

又やの部にいへる如く。切るゝやの上。切るゝ格の辭より受る定まり也。

これやとかとの格のかり也。一二例をいへ。切るゝや。ありやなし

やといひ。かこ「あるか「なきかといふ。ある「なきりつゞく格の辭「あ

り「あしり切るゝ格の辭也

又切るゝや。見ゆや「きこゆやといひ。かこ「見ゆるか「聞ゆるかとい

ふいづれの言も皆これらの格也。准へてささるべし。猶四の卷やの部の切る

るやの條に委くいへり。

後拾三 きかばやなそのかみ山の郭公有しむかしのおなじこゑかと

金八 あとすともなからん世に思ひ出よ我ゆゑいのち絶し人かと

みよし野の山べに咲るさくら花雪かとのみぞあやまたれける

同三 夏の夜のふすかとすればほどきすなく一聲にあくるまのゝめ

浦ちかくふりくる雪はまらなみの末のまつ山かとどみる

同六 玉ばこの道をつねにもまごのなん人をとふとも我かのん

右の歌共のかにて切れたるをとと受て下へつゞけたる也

○かを重ねる格

古三 こぞの夏なきふるしてしほどきすそれかあらぬか聲のかりらぬ

同十八 よの中へ夢かうつゝかうつゝかうつゝかともゆめ共去らず有て奇ければ

後十六

拾七

同十八

新十七

同十八

古五

新十七

万十二

古十三

新勅十八

あこれともうし共いとしかげろふのあるかなさかかにけぬる身なれば
 津の國の赤にむわたりにつくる田をあしかなへかとえこそ見わかぬ
 いきたるかまぬるかいかにおもほえず身より外ある玉くしけかな
 わがよをばけふかあすかとまつかひの涙の籠といづれたかけん
 れもふべきわが後の世もあるかあきかなければこそ此世にすすめ
 これらの二つ重なる。つねの事也。又三つと

秋風のふきわけにたてるまら菊の花かあらぬか波のよそるな
 える夜の星か河邊のはたるかも我すむかたのあまのたぐひか
 うつゝにか妹がさませる夢かもわれかまごへる戀のまけさに

此萬葉の歌なるの中のかと切るゝかにてもの添たる也上下なる二つ下
 へつゝくか也。又四つと

君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか
 おもへた夢かうつゝかわさかねてあるかなさにかげく心を

此歌の二つづゝ二つ重なり

○かとの意のか

後拾八

つねをらばあそでかへるもなげかじを都いづとか人のつけくる

此かて語のなかばに在て下へつゝくかにてうこの意也
 此下のみを切るゝかなり

古十七

後拾六

後拾六

後拾四

新十四

玉四

西行

古二

おいぬとてなぞか我身をせめきけんおいすばけふにあとまし物か
 うきよをばそむかばけふもそむきなん明日もありと頼むべき身か
 かくてのみやむべきものかちのやふるかものやしろの萬代を見ん
 わがこいらかえらんものかかいらやの下たくけふりわさかへりつゝ
 わすれなばいけらん物かと思ひしにそれもかなぬ此世なりけり
 鹿の音をかきねにこめてさくのみか月もすみけり秋の山ざと

こゑたえずなげやうぐひす一とせに二度とだにくべきとるかと

古四 ちぎりけんこゝろどつちさたなばたの年に一たびあふあふ かこ
 後十八 みちのくのそぶちの駒も野がふにのあれこそまされあつく物 かこ
 詞七 くれなるになみぶの色も成にけりかひるの人のこゝろのみ かこ
 同十 わがねもふことこのまげさにくらぶれば信太の森のちえもの かこ
 千九 かなしさをつと思ひもなぐさめよ誰もつひあつとまるべき かこ
 古十一 人めもるわれ かこ あやな花すゝきなさはにでてこひずしもわらん
 後二 立わたるかすみのみ かこ 山たかみ見ゆるさくらの色もひとつを
 同十四 まぢかくてつらさをみるのうけれどもうさの物 かこ 戀しきよりの
 千三 をちかへりぬるともさなけ時鳥のまいくか かこ さみだれのそら
 同十一 もらさばや忍びとつべきなみだ かこ 袖のまがらみかくとばかりの
 〇かの意のかこ
 千三 あふひ草てる日の神のこゝろ かこ 影さすかたにまづなびくらん
 新勅八 くればまたわがやどり かこ たび人のから野の原の萩の下露

古十五 天雲のよそにも人のなりゆく かこ さすがにめにの見える物から
 同十六 うちつけにさびしくも有 かこ もみぢ葉もぬしなき宿の色なかりけり
 同十七 ぬさみだる人こそ有らしま玉のまなくもちる かこ 袖のせばさに
 金二 行人をまねく かこ 野べの花すゝきこよひもこゝに旅寐せよとや
 新四 ところひかねさこそ露のまげからめやとる かこ 月の袖のせばさに
 〇かも
 古二 今も かこ 咲にはふらんたちばなの小島の崎の山ふきの花
 拾万十一 かし引の山鳥の尾のまだりを 長きなが万 長くし夜をひとり りも ねん
 大かた此類のかも かこ 語の半に在て下へつゞけり かこ 新續古今五「君のみや
 あかずかも見んをのゝえの栝にし山の峯のもみぢ葉。是のやとかと重な
 れるひがと也
 古二 春がすみいろの千種に見えつるのたなびく山の花のかけ かこ
 同九 天のとらふりさけ見れば春日なる御笠の山に出し月 かこ

古十 花ごどにあかずちらし風なればいくとばくわがうしと か 思ふ
同十六 いかならんいとはの中にすまば か よのうき事の聞えこざらん

右の外もなにかれいくななどの類の下にあるかこのすべて皆かの意也
すべてかどかこの本同意にて古へ通ひし用ひたり。然れども後世に別
意なるが如くなる故に。まばらくかこの意かの意と分て擧ると。やとやとの
の例のごとし

○かなの意のか

古一 浅みどり糸よりかけてまら露を玉にもぬける春の柳 か

同二 どいむべき物どのなしにとかなくもちる花ごどにたぐふ心 か

同十二 風ふけば峯にわかるくまら雲の絶てつれなき君がこころ か

同十五 つれなきを今のこひじとおもへども心よわくもおつるなみだ か

同十七 どいめあへずうべもとしどいこれけりまかもつれなく過るよひ か

同二 うつせみのよにも似たる か 櫻花さくと見しまにかつ散にけり

古十三 玉くしげゆけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人見けん か

拾十二 かやり火の物れもふ人のこころ か 夏のよすがら下おもゆるらん

万同十三 秋の夜の月 か 君と雲がくれまばしも見ねばこゝら戀しき

後七 此たぐひのみな切るくかも也。また

秋の夜に鷹 か 〇なきて渡る也わが思ふ人のことつてやせし

此かも下へついくやうに聞ゆれども然らず。猶切るく也。其故と。すべ
てかの結びのやと同格なるに。三の句なりとある。かの結びにあらす。
其上ついでての歌の意もさだかならざれば也。〇風雅十五「今もかも絶せ
ぬ物か年ごとの秋の半の望月の駒。此「今もかもいた」今もどいふ意に
て。かもやすめ辭にかれたりひがと也。古今の歌の「今もかも咲に
はふらんなどのてにをを。よくもわさまへせしてとられたるなり。す
べて「今もかもどいふ」。も二つ共にやすめ辭にて「今かどいふ意な
る物をや

○かなの意のかも

古十七 わたのこらよせくる涙のまばくも見まくのほしき玉津島 か

同
二十

霜八度おけどかれせぬ柳葉の立さかゆべき神のさね **かも**

此かも萬葉にいとおほし。すべてかの集に「かなどいふと」なくして。みなかもとのみいへり。拾遺集などにはおほかるもみな萬葉の歌也

○めかも

古
廿

山科のおとこの山の音にだに人のゑるべくわがこひ **めかも**

万廿
東歌

たちばなの下ふく風のかぐとしさつくとこの山をこひずあら **めかも**

此外萬葉十四の東歌にも二つ三つ有又古今序の文に「今をこひざらめかもと有

○かに

古
七

さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まがふ **かに**

同
十六

なくなみぶ雨とふらなんわたり川水まさりなばかへりくる **かひ**

拾
二

山ざとにゑる人もがなほどしきすなきぬときかばつげにくる **かに**

古
二十

まさむくのあなじの山の山人と人も見る **かに** 山かつらせよ

此かにのかを後世に清てよめども本濁るべき辭也萬葉にかに共がねと

もいへるおほし七の巻古風の部に出せり

○かや

玉
十

わかるべきとき **かや** さればかきくらすわが涙にのわけぬよのそら

小大君
集

なのりせでこするにこすば郭公春かけてこし鳥と **かや** 見ん

○新千歳十八忠岑「咲花のこかなかるかや。にはひつゝ人の心をあだになすらん新拾遺廿貫之「秋のゝを分つゝゆけば花もみなりかゝるかや。袖にまむらん此二首のかるかやを隠せる歌にてかやと香やなり辭にのあらず

拾
七

なにと **かや** くきのすがたのおもほえてあやしへ花の名こそ忘るれ

源氏
藤末葉

なにと **かや** けふのかざしよかつ見つゝおぼめく迄も成にけるかな

「なにとかやといへる初句此外千歳十三新古今十八などにも有

○何等の下におくか **かや** 同

次の何の部に出せり

○がなの意のがかも 六の巻かなの部に出せり

○こそこの結びのまかましか 五の巻こそこの部に出せり

○まかばましかば 三の巻ばの部に出せり

○まかど 五の巻どの部に出せり

何

○なに など ちど たれ たが いかい いかい いかで いかで いかで

いつ いく 件の類皆てにをこの結びの格同じき故に一つに合せて何の部とす。○大

此書に何等といふを。件の辭をもすべし。鏡の頭に何と擧たる是也。さてその結び

あてせて一つにいへりといふを。いづれも同じく。中の行の段の辭にて。一の巻に出せる三轉證歌の如し。その證

歌に。右の辭共の内。いづれにまれいとつづゝを出せり。それに准へて。此部の内

なる辭と。みな同格の結びと知べし。

○何の下におくかかど

何等の辭をおきて。その下の結びとの間に。かもじををさむと常におほし。なにかう

らみん。たれかまらまし。いつかきなかんなどの如し。又「夢に赤にかたなぐさまん。

「いつかど雪の消る時あるなどの如く。かど共おけり。さて此かど。右のどどく何等

の下にやがてつゞけてもおき。又言をへだててもおけり。なにをうしどか人のかるら

ん。たがまをを我之頼まんなどの如し。かとも同じ。

後 十三 いつまでのとかあき人の言の葉かこゝろの秋の風をまつらん

同 たがためにわれが命を長とまの浦にやどりをまつらん かりこし

かやうに詞をおほく句をへだててもおけり。されどその歌の意にまたがひて。おくべ

き所ともさだまれり心にまかせていづこにもくなく事にあらず。さればおき所の

よろしからぬ歌古へにもこれかれあり。左に出す。

新 三 行末をたれまのべとて夕風にちぎりかおかん宿の立ばな

新 勅 十八 あそれなど又とか影のなかるらん雲がくれても月のいてけり

續後 九 かたそぎの行合の霜のいくかへりちぎりかむすぶ佳吉の松

玉 十五 いく聲にゆめかおどろくあかつきの寐覺の後のかねぞすくさき

万 十二 神無月雨の間もおかずふりにせばたが里の間にやどかからまし

元輔 集 萬代の春の子日に出て見ん松といく度おひかかると

源氏
推本

雪ふかみみぎはの小せうたがためにつみかそやさん親なしにして

件の歌などもかもしの。皆かならず△のまるしの所にねくべき意なるを。そこにはおきがたき故に。せんかたなく所をかへて下における物にて。いづれも聞よからず。後世此例をまねぶべきにわらず○後撰七「奇どさらふ秋かどとんからにしき立田の山の紅葉あるきを。此かいた」秋かといへる辭にて。上のなごにいかうらねば別事也

又なにしかなにしかもなにしかりたれしかもいつしかいつしかもなごともいへるの。しももやすめたる辭にて。たいなにかたれかいつかといふに同じ

近き世の人と。右の如く何等の下にかくかもじを誤りて。やといふとおはし。なにをうしどか人のかるらんといふべきを。なにをうしどや人のかるらんといひ。たがまををか我のたのまんといふべきを。たがまををや我のたのまんとやうによむゆり。すべてかゝる所やまのく皆ひがと也又歌ならぬたの詞に殊に此誤り多し。なににかといふべきを。なににやといひ。いかなるゆゑにかといふべきを。いかなるゆゑにやといひ。たれにかといふべきを。たれにやとやうにいふ類皆ひがと也。古人の文に此誤りある事なきを。今の世に文よくかくと思ふ人も。をさく此格を辨へ知れるのなし。すべて何等の下にやといふとなく。皆かなりと心得べし。

後撰「春雨に
いかにぞ。梅や

にはふらん云々。これの「いかにぞにて切る」詞なれば。下のや妨なし。續古今四「たれとなく心に人のまたる、やながむる月のさそふなるらん。これの「たれどいへれば。たれのと」のひ下へ及ばず。源氏真木柱「かきたれてのどけき此の春雨に故郷人をいかに。まのふや。これといかにして切ればやもじ妨なし。これらの歌をあしく見てまごふべからず。千五百番歌合に「春きて霞の衣いくかさね袖師の浦の波やたつらん。此やもじの誤りなり

但しなごやなどやいかにぞやいづくぞやなになれやいかなれやなど也。別に一つの格にて。これらの格の皆四の卷や。かしなべての事にあらず。又やいかにや

なになご。やもじを上にかく格もあり是もやの部にいだせり

○動かぬ言にて結ぶ何

後拾 十一 をおねさしわたのこらゝらえるべせよ **いづれ** かあまの玉藻かる浦

新 一 いとねふみかさなる山を分すて花も **いく** へのあとのまら雲

同 六 ちりかゝる紅葉ながれぬ大井川 **いづれ** むせきの水のまからみ

同 十四 まられじも同じ袖に之通ふとも **たが** 夕暮と頼む秋かせ

貫之 集 わけたてばまづさすひもの糸よわみ絶てあらずば **きど** **いけるかひ**

後 十二 ちかけれど **なに** かりたるし **逢坂の關の外ぞ** ともひ絶なん

後拾 十一 **い**か なればまらぬにおふるうさぬなと **くるしや** 心人まれずのみ

○いひかけにて結ぶ何

金 五 **い**か ばかり神もうれしとみかさ山二葉の松のちよのけしきを **見**

同 八 あふみてふ名と高島に聞ゆれど **いづら** のこゝにくる本のさと **來**

同 八 **い**く かへりつらしと人をみくま野のうらめしながら戀しかるらん

新 四 **たれ** をのままつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあゝらし

新 四 大かたの秋のねぎめの露けくばまた **たが** 袖にあり明の月

同 六 月ぞすむ **たれ** かりこゝにさの國や吹上の千鳥ひとりとなく也

同 十 **い**づく にかこよひと宿をかりころもひもゆふ暮の峯のあらしに

同 十六 なれくして見しいなごりの春ぞとも **なご** 知ら たら川の花の下陰

同 十八 **い**かに して今までよにあり明のつきせぬ物をいとよこゝろと

同 二十 おとにさく君がり **いつ** かいさの松まつらん物を心づくしに

万 九 籠のうへの御船の山ゆ秋津べにさなき渡ると **たれ** よぶこ鳥

○金葉三「いにしへのなにとのこを思ひ出で高津の宮に月のすむらん。

これに難波をやがてなにてふ辭おひひかけたり一の格也

○切る、何 語のとちめにあり

後 十三 れもふてふことと **い**かに **な**つかしな。後うき物と思はずもが奇

拾 十八 いきたるかしぬるか。 **い**かに **お**もほえず。身より外なる玉くしげかな

源氏 竹河 **い**でや **なご** 數ならぬ身にかなぬと人にまけじの心なりけり

又下にかかを添て切れるあり

よのつねの人のこゝろをまだ見ねばなにか此度けぬべき物を

ひたふるにまなばなにかかこかさもあらばあれいきてかひなき物思ふ身の

○右の外あいつらといひて切るゝおほし。それの下をるいづらの條に別に出せり。又や何と上にやもじあるり。四の卷やの部に出せり。

○何を重ぬる格

後十八 世中はいかにやいかに風の音を聞にもいまはものやかなしき

拾八 よのなかをかきいひくのとてくいかにやいかにならんとすらん

夫木 能宣 此世をも後をもいかにいかにせんもえんけぶりもむすばれつゝ

あれらいたいに重ねたるなり。また

玉江こぐあしかり小ふねさし分てたれをたれとか我の定めん

おもひしる人も有ける世中をいつをいつとて過すなるらん

わがやどの花たちばあにふく風をたが里よりとたれながむらん

千五 新八 たがためにいかにうてばかからころもちたび八千度聲のうらむる

いつ なげき いつ思ふべきことなれば後のよまらで人のすぐらん

同十五 いかにしていかに此世にありへばかまばし物物をれもとざるべき

續後五 西行 なにこそをいかに思ふとなければもとかわかぬ秋のゆふぐれ

万四 とつく人に人をあひ見ていかにならんいづれの日に又よそに見ん

又相對へて重ねたるもわり

後二十 故郷に君をいづらとまちといづれの空のかすみといまし

拾九 をりからあいづれともなき鳥の音もいかにさだめん時ならぬ身と

後拾八 いかにばかり空をあふぎて歎くらんいかに雲もともまらぬわづれを

○廣田の歌合に「いくとせの春にまられて過ぬらん老木に花のいつかさくべき。俊成卿判に「いくとせと「いつかと重なれるを難せられたり。まことにこれのよろしからず。又風雅二「人もなきみ山のおくのおよぶ鳥いく聲なればたれかこたへん。同十七「露さえんいつのゆふべもたれかまらんとふ人奇しよもぎふの庭。これらもいみしくわろし。すべてみ

だりに重ぬべきとにあらす。

○もと受る格 此格結びにかゝらす

古二 ぬれつゝぞまひてをりつる年の内に春の いく かもあらじと思へば

同十三 うば玉のやみのうつしはさだかなる夢に いくら もまさらざりけり

同十八 いく よしもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひみざる

後一 まつにくる人しなれば春の野のわかなる なに もかひなかりけり

同六 いつ とも月見ぬ秋となきものを分てこよひのめづらしき哉

拾二 いづく にもささのすらめぞ我屋戸のやまと撫子たれに見せまし

後拾四 さびしさにやを立出てながひれ いづく も同じ秋の夕暮

同八 たれ がよもわが世もまらぬよの中にまつほぞいかゝあらんとすらん

同十五 月見れば たれ も心ぞなぐさまぬ姨捨山のふもとならぬぞ

同十五 いつ よりもくもりなきよの月なれ見ばる人さへに入がたきかな

新十四 いつ もさく物とや人のおもふらんこぬ夕ぐれのまつ風の聲

新十四 ならひこし たが いつそりもまだまらでまつとせしむの庭の蓬生

件の歌をものごとくも受るときにその下の結びありかゝらす

○なぞものもの別なり

拾九 大かたの秋に心よせしかど花見るときと いづれ ともなし

詞七 わがこひとふたみかりれる玉くしげ いかに すれどもあふかたぞなき

新七 わかれてもこゝろへだつな旅衣 いく へかさなる山路なりとも

右の如くともども受るももに同じ

○もと受る意にてももじなき格

古十 いま いく か春しなれば鶯も物とながめておもふべらなり

後拾十一 おく山の真木の葉まのぎふる雪の いつ とくべしと見ぬ君かな

詞十 わがためにつらき人をばねきながら なに のつみなき世をや恨みん

新助一 玉ばこの道のゆくてのえる風に たが 里まらぬ梅の香ぞする

風十 敦忠卿 人しれず思ふこゝろととしへても なに のかひなく成ぬべきかな

これらいつれもどいとざれ共。もと受たる意也。△のまるしのところにもを入れて心得べし。○風雅十二爲家卿「契りしをたのめばつらし思ひねばなにを命のなぐさめぞなき。これのすこしいかにそや聞ゆ

○二つの何 此格結びおかりならず

古 十四 みちのくの忍ぶもぢずり **たれ** ゆゑにみだれんと思ふ我ならなくに

同 津の國の **なに** 難波 おもえず山しろのどとに逢見んとをのみこそ

同 二十 みちのくの **いつく** いづこもた おあれど盪がまの浦こゝ船のつなでかなしも

万 八 **いつく** に **な** なきもしにけん郭公わぎへの里にけふのみぞなく

同 十七 梅花 **いつ** いづ をらじといととねとさきのさかりの惜き物なり

此格の。そのさしていふ物お對へて。それならぬ他の物を何といふ也。古今十四の歌の。思ふ人に對へて。其他の人をたれといへり。君をねきて他の人故にみだれんと思ふ我ならなくに也。又「なにと思へず」の。どとに逢見ん事をのみこそ思へ。其他の事と思へず也。いつくのあれど。他の所とあれどなり。いつくにのなきもしおけん。他の所にのなきもまにけん也。いつとをらじと思へねど。他の時とをらじと思へねどな

り○此格たれたがといへるの猶あまたあり。別にたれたがの條に出せり

右の餘りの何の類の辭共の。すべてにわたる格ども也。一つの辭ごとにれのかのすこしづゝかおれる格あるは。此下お分て出せり

● なに

○なに

古 十五 おひ見ねば戀こそまされみなせ川 **なに** に深めて思ひそめけん

後 九 おふとのかた糸ぞとはまりながら玉のをばかり **なに** によりけん

これらにを添たり又「な」たどへんなどいふたぐひのには是どの別也

○なに

古 十四 おふまでのかた見も我は **なに** せんに見ても心のなぐさまなくに

後 十五 **なに** せんにへたのみるめをおもひけんおきつ玉藻をかづく身にして

これのせんにといふ事を添たり。さて古今なるの切れ後撰なるの切れず

いひかまひかゝること也

○なにせん

拾 十一 こひまなん後之なにせんいける日のためこそ人は見まほしけれ
これなにせんといひてにもじりなし

○なにしに

新勅十一 藤原盛方 六百番 すみだ川せぎりにむすぶ水の沫のあこれなにしに思ひそめけん
わかれちの有けるものをあふ坂の關をなにしにいそぎこえけん

○なにし

六帖 なにしに撰七後菊いろそめかへしにはふらん花もてとやす君もこなくに

風二 白河院 山ふかくたづねになにこでさくら花なにしこゝろをあくがらすらん

○なにと

新後二 西行 新續後十 後鳥羽院 下野 なにとかくあだなる花の色をしも心にふかくれもひそめけん
ゆきくれて一夜やどかる松が根になにと嵐のそこをらふらん

○なにとて

後 十一 夢のぞとかなき物はなかりけりなにとて人にあふと見つらん

堀川 百首 乙かなしやわがよものこりすくなきになにとて年のくれをいそぐぞ

○なにそ

新 十四 うき人の月はなにそのゆかりぞとれもひながらもうちあがめつゝ

此なにのめづらし。猶三の卷ぞの部いくその條にくとしくいへり

○萬葉になににすどかといへると多し。又なににすれぞ共あり。これら古今以後になに見えぬ辭也

○二つの格

金 五 長濱のまさごの敷もなにならずつさせず見ゆる君が御代かな

續古廿 公實卿 君が代の敷にくらべばなにならじ千尋の濱の眞砂なり共

大和 物語 なにばかりたかくもあらずよのつねのひえを外山と見るばかり也

堀川 百首 あり見てのあしたの戀にくらぶればまらし月日もなにならぬ哉

○なにそと 三の卷ぞの部に出せり

○なになれや 此卷やの部に出せり

○なにとかや 此卷かの部に出せり

○なになりごとぢむる格 二の卷變格の部に出せり

右の外ことなる事し

●なご

○下にかもじをおく例。なごかなごかごつゞけて置くのみ也。下に詞をへだて、おける例は見えず。後撰七なごさらん秋かごのん云々此かゝなごにあづかれる辭にあ

○なごて

後拾 十 ちごてかく雲がくるらんかくばかりのどかにすめる月もある世に

十三 ちごてかくおもひそめけん郭公雪のみやまの法のこゑかは

いせ ちごてかくあふごかたみになりけん水もらさじとむすびし物を

後拾 二 ちごてかほもいへるの

みちよへてなりける物を ちごてかほもいへるの

○なごや 此卷やの部に出せり

右の外ことなる事なし

●なご

○下にかもじをわく例なし

○ちごも

古 十一 かりり火にあらぬ思ひの ちごもかく涙の河にうさてもゆるらん

金 七 ちごもかくこひぢおたちてあやめ草あまひ長くも五月なるらん

新後撰一 後さかの院 ちごもみな人の家路わするゝ花ざかり ちごしもかへる春のかりかね

ちごしもめづらし

○なごや 此卷やの部に出せり

○なごど 五の卷どの部に出せり

右の外とあることなし

●たれたが

〇一つの格

古十四

みちのくのまのぶもぢずり^{たれ}ゆゑにみだれんと我ふ人奇らなくに

後四

まつ人は^{たれ}ならなくに郭公ねもひの外に赤かばうからん

拾十一

まのぶるも^{たれ}ゆゑならぬ物なれば今いなにかは君にへだてん

古四

^{たが}秋にあらぬものゆゑ女郎花など色に出てまださうつろふ

同十二

こひまぢば^{たか}名はたし世中のつねなき物といひひなすとも

後十二

ちかひても猶ねもふにたまけにけり^{たが}ためをしき命ならねば

万七

あさしものけやすき命^{たが}ために千年もかもどわが思ふなくに

同

みなどこにまづくまら玉^{たが}ゆゑに心つくしてわがおもなくに

同十一

れして難波菅笠おきふるし後は^{たが}きん笠ならなくふ

同十二

里人もかたりつぐかねよしゑやし戀てもまなん^{たが}名ならめや

萬葉にハ猶ねはし。此格之上に出せる古今廿一みちのくのいづくのわれと云々などの歌と同意なれども。たれたがといへるの中にも多き故に

別に分てこゝに出せり。其意のかしこみいへるごとく。他の人をさしてたれたがといふ也

此外ことなるをなし

いづよ

〇いかさまいかなるいかなりしいかなればいかならんなどいふ
いかならんに切るゝと切れざるどあり

新六

深みどりあふそひかねて^{いかならん}まなく時雨のふるの神杉

これハ切たり。切れず下へつゝり

古十八

^{いかならん}いとはの中にすまばかと世のうき事の聞えこざらん

〇ねがふ意のいかにして 俗語になにとぞしてといふ意也

後十

ひとりのみ思ふはくるし^{いかにして}ねなじ心に人をしへん

同十三

^{いかにして}かく思ふてふことをだに人づてならで君にかたらん

同十四

^{いかにして}ことかたらんはとゝきすきげきの下になければかひなし

猶此意なる「いかで」といへるに多し下の「いかで」の條に出せり

○「いかなれや」此卷やの部れやの條に出せり

右の外ことなるとなし

○「いふ」

○下にかもじをねく例奇し

○「いかゞと」

拾 十九 よのなかは「いかり」をせましきげ山の青葉の杉のゑるしだになし

新 十二 ものねもふといをねばかりの忍ぶとも「いかり」をすべき袖のまつくを

あくの如く下にを添てもいへり

此外ことなる事なし

○「いふ」

○下にかをおく事。「いかでか」「いかでか」とつゞけておけるのみにて。詞をへてくおく例のなし

後 十五 ○ねがふ意の「いかで」 俗言ふなにとぞといふ意也 此格結びにかゝりらず

同 十九 「いかで」かの年ざりもせぬたねもがなわれたる宿にうゑて見るべく

拾 十六 たよりあらば「いかで」みやこへ告やらんけふ白川の關はこえぬと

同 十一 戀といへば同じ名にこそ思ふらめ「いかで」我身を人にまらせん

同 十三 夢をだに「いかで」かた見に見てしがなあをぬるよのなぐさめにせん

同 十七 「いかで」なほあじろのひをにこといんなにによりてか我をどのぬと

新勅七 公忠 みな人の「いかで」とおもふよろづよのためしと君をいのるけふ哉

拾 十一 又を添ていへるもあり

夫木 又も添たる

又も添たる

又二つ重ねたる

又二つ重ねたる

拾十五

いかにいかにこふる心をなぐさめて後の世までの物をおもとじ
右の外ことあるとなし

いづれ

○いづれいづれいづれいづれかたなごもいふ

○いづれまされりとどぢむる格 二の巻變格の部に出せり

右の外ことなるとなし

いづれ

○すべていづらの皆切る格にて下へつゝくる例はなし つゞきたる如くに聞ゆる
もみな切るゝなり

古十七 玉だれの小がめや いづら □こよろぎの磯の浪わけれきに出にけり

古十八 ふるさどに君と いづら □まらとつれれの空の霞といとまし

いせ 物語 いづら □さくら花こけるからとも成にけるかな
いの中に いづら □我身の有てなしあこれとやいとんあなうとやいとん

新十五 いなづまはてらさぬよひもなりけり いづら □はのかに見えしかけるふ

狭衣

たのめこし いづら □とさこの杜やこれ人ごのめなる名にこそ有けれ

又下へごを添てもいへり

古十九 むつごともまだつきなくに明ぬめり いづら □秋の長してふに

後十 ともかくもいふ言の葉の見えぬかな いづら □露のかいりどころの

金八 あふみてふ名は高島にきこゆれど いづら □こゝにくり本の里

右の外ことなる事なし

いづれ

いづれかこれいづれかといふにしをさめる物にて。しやすめ辭なればもその意

なし。然れども後世に。いづれかといへば。別に一つの言のごとくなれり

後一 松もひさわかかなもつますなりぬるを いづれ □さくらとやもさかなん

拾十九 いづれ □もつくまのまつりごとくせなんつれなき人のなべの敷見ん

古四 けふよりは今こ年のきのふをぞ いづれ □どのみまら渡るべき

後八 いづれ □と山のさくらもわがごとく年のこなたに春をまつらん

同九

いづしかなどわがまつ山に今んとてこゆなる浪にぬる袖かな

拾十二

いづつかどくれをまつまの大空にくもるさへこそうれしかりけれ

同二十

いづしかなど君にと思ひし若菜をば法のためにぞけふはつみつる

件の歌どもいづしかり。いづつかくど待意也。また

拾九

いづしかなどあけて見たればとま千鳥跡あるとにあとのなきかな

帖六

いづしかなもけふはくらしつ明日香川わたりて早くたまもかづかん

これらに待意にあらざるが如く聞ゆれ共。おは待意也拾遺の歌。いづつかとまちてあけて見たれば也。六帖の。四の句の上へうつして恐得べし。いづつかも渡りてと待意なり。また

一金一

いづしかなど明行空のかすめると天の戸よりや春のたつらん

同

いづしかなど春のまるしにたつ物は朝のそらの霞なりけり

千十一

おもふよりいづしかなぬるいたも哉なみぞ戀のまるべなりける

同十三

よそにしてもとさし人にいづしかなど袖のまづくをとるべきかな

新十八

頼みこしとがふる寺のこけの下にいづしかなくちん名こそ惜けれ

玉四 紫式部

赤染衛門集

まのゝめの空さりわたりし家集いづしかなど秋のけしきふ世成りにけり

いづしかなどかすめる空のけしき哉春まつ人はいか見らん

右の歌共のいづしかり。とやいつのまにかといふ意也

右の外ことなるとなし

いづ

○いづらいくばく古今いづはかりなといふ物名

○すべていくといふ辭。初學の輩のみだりに「いく千年」「いく萬代などいひて。ただ多きと久しきと心得たるのみが事也。いくの疑ひの辭なれば。たゞ「いく千代などとのみいひて。いく千代ぞと千代の數を問ふ也。「いく千代もといへ。もにて久しき意になる也。たとへば「いく千代にはへ菊の花といひて。いくの辭かならず。「いく千世もにはへといへばよろしき也。すべて此けぢめをよくわきまへてつかふべき辭なり。千載三「をちかへりぬる共なきけ時鳥今いくかか五月雨のそら。玉葉十 四和泉式部「つれづれとながめくらせば冬の日も春のいくかにことならぬ

かな。これら只いくどのみいひて。多くの日敷の事とせる。いかにぞや聞よからず。又風雅十七「うしどもうからずとてよしやたゞ五十の後のいくほどのより。これ又たゞ「いくほどのみいひて。いくほどもなき意にせるのいかゞ。すべてかゝるたゞひ心すべき事也。いくとふ辭のつかひさまにて。よく巧拙のみゆるとある物也

○いくと 三の巻どの部に出せり

○「いく夜ねぎめぬの類 いくの結びぬるあるにぬと 二の巻變格の部に出せり

右の外となることなし

詞繪瓊五之卷

こそ

○この結びと。紐鏡の左の行の段の辭にて。一の巻に出せる三轉證歌のごとし。凡てこそこの結びとある辭の。上にこそなくて。切るゝとさと。おはくの仰する辭の。下知の詞なるを。こそとかゝれば。仰する辭にならず。思へ「ゆけなとゝいふたぐひ。上にこそなきとさの仰する辭あるを。こそといへば仰又上にこそなくて。語のつゞく所にある時と。みなかならずばとするとばにならず。よければ「あしければ。よければ「あしければ。又ととの二つの辭へつゞく也。いひしかば「聞しかば。いひしかと。「聞しかと。又「思ひめと「ゆかめとなどのたぐひ也。けれしかめとみなこそ。大かたてにをえ結び辭也。餘り是に准へて考へ試むべし。此格のたがふの一もなし。この結びばかりは。皆れのづから雅語の格と異なるとなし。これ又れのづからの妙也。

○動かぬ言にて結ぶこそ

新十五 人ならばおもふこゝろをいひてましよしやさ こそ いまづのをだ巻

新勅十八 まよひこし夢路のやみを出ぬればいろ こそ よそのすみぞめの袖

六帖 たらねどもむさし野といへばかたれぬよしやそ こそ と紫のゆる

新後十五 新定家卿 かつ見 こそ あだの大野の萩の露 うつろふ色はいふかひもなし

大和物語 こそ あみだの河にゐる千鳥 なきてかへると君のえらすや

源氏 藤末葉 こそ い岩もるあるじ 見し人のゆくへのえるや宿のまし水

○いひかけにて結ぶこそ

金七 こひえなでこゝろづくしに今までも頼むれば こそ いさのまつ原

新十八 かきながす言の葉をだにまづむきよ身 こそ かくてもやま川のみづ

後十七 なにこづをけふ こそ みつの浦ごとにこれやこのよをうみわたる船

後拾十二 まるらめや身 こそ 人めをこゝかりの關に涙はとまらざりけり

金七 逢見んとたのむれば こそ くれことりあゆしやいかゞ立かつるべき

新六 こそ ちかくなるみかたかたかく月にまはやみつらん

○こそとどちむる格

古十四 津の國のなにおもえず山しろのとはに逢見んとをのみ こそ

後十一 あしたづの澤邊に年へぬれ共こゝろと雲のうへののみ こそ

玉七 行成卿 めづらしきけふの圓居と君がため千代に八千世にたゞかくし こそ

大和物語 かさゝぎのわたせる橋の霜のうへをよこにふみわけこそさら こそ

すべてこそとどちむるの。言をいひのこして下へその意をふくめたる物

也○風雅十七又拾玉「いへばうしえぬる別れのがれぬを思ひもいれぬ

よのならひこそ。又千五百番「花もなし人めもえらぬ柴の戸もさすかに

春のくるいけふこそ。これらこそいのこざる歌なり

万十一 せとう歌 いさのをに我を思へど人めおほみ こそ 吹風にあふばまばくあふべき物を

かくなかなばにて切れたるいめづらし

○こそ二つある歌 深さ こそ 藤のころもいまさるらめ なみだの同じいろに こそ えめ

万六 長歌 此山のつきばのみ こそ この川のたえばのみ こそ 云々やむ時をあらめ

此萬葉の歌のこそを二つたゝみて一つのめにて結べるいとめづらし

○こそと

古十四 石間ゆく水のまらなみ立かへりかくこそ見えめあかすも有かな

同十七 大とらやをしほの山もけふこそ神代のもおもひいづらめ

かくのごとく下へを添るとつねにおほし。とに意奇し

○もこそ もこそ行末をおしとかりてあやぶむ意の辭也。つねのこそと意かかれり

ぞどもぞとのけぢめのごとし。三の巻ぞの

部のもぞの條どかむがへあすすべし

古二 花見ればこゝろさへにぞうつりける色にいでじひとみこそまれ

同四 こよひこむ人へのあはれたなばたの久しき程にまちもこそすれ

後十三 淵ながら人あよのさじなみだ川わたらば浅き瀬もこそ見れ

拾十六 おもふといとでやみなん春がすみ山路もちかしたちもこそきけ

千三 五月雨にぬれくひかんあやめ草浪の岩かさなみもこそこせ

新六 みかりするかた野のみ野にふる霰あなままだき鳥もこそたて

同十八 かくばかりうさをまのびてながらへばこれよりまさる物もこそ思へ

又同じとながらあやぶむ意のなき

後九 人のうへのごとしいへばまらぬかな君も戀するをりもこそあれ

拾一 身にかへてあやなく花を惜むかないければ後の春もこそあれ

新二 山ざとの庭よりはかの道もがな花ちりぬやと人もこそとへ

後拾一 思ひまゐる人もこそあれあぢきなくつれなき戀に身をやかへてん

又た々常のこその上にも添たる

古十三 うつゝにこそもあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ

拾二 春かけてきかんともこそ思ひしか山はとぎすおそくなくらん

同十二 玉ぼこのとは道もこそ人とゆけなど時のまも見ねば戀しさ

六帖 月夜にのこぬぎにもこそまつときけくるをもかへす物にざりける

六和物語 かくさける花もこそあれわがために同じ春とやいふべかりける

山家集

あこれともころに思ふはどばかりいこれぬべくばとひも こそ せめ

これら行末をおしとかる意にあらず。上なるもこそとの異也。此格之大かたの聞よからぬ物なり。故に右の山家集の歌も新古今に「とひこそいせめと直して入られたり。土左日記の詞に「まなこもこそ二つあれといへるも。此格のもこそ

○まもこそ

是のまもこそと重なりたる物にして。 も こそ の上に ま の も こそ の意と添たるに い あらず

の異也 まも こそ の條と考へ合すべし ま も と い ふ に 。軽く却ての意をふぐめりさればこそその下へ「かへりてといふ言を加へて見れば。歌の意明らかなり。

後十一

逢見てばなぐさむやとぞ思ひしになぞり まも こそ 戀しかりけれ

拾十三

わすれなん今のとれと思ひつゝぬる夜 まも こそ 夢に見えけれ

千三

はとゝぎす又もやなくとまたれつゝきくよ まも こそ ねられざりけれ

續拾十五

ながらへて又あふまでの玉の緒よたえぬ まも こそ くるしかりけれ

玉十

たのめしをまつよの雨の明方にをやむ まも こそ つらく聞ゆれ

續千十五 俊成卿

わすれ草のみにこしかと住吉の岸に まも こそ 袖をぬれけれ

清正集

かたみにとなくさむやとてからころもさるに まも こそ ぬれまざりけれ

千九

ちりぐにわかるもけふのかなしさになみだ まも こそ とまらざりけれ

此一首のみ「かへりての意なし。たゞ「涙もとまらざりけりといふ意也。めつらし

○まもこそ 下に と を添たるも同じ。 と に い 意なし

是に三つのかり有。一に「さやうにこそといふ意

拾二十

朝がほをなにかなしと思ひけん人も花を まも こそ 見るらめ

千十三

今朝とぬつらさに物と思ひしれ我も まも こそ とうらみかねしか

金八

あふとの夢ばかりにてやみにしを まも こそ 見しかと人にかたるな

新十五

れのづから まも こそ とわれとおもふまにまると人のととすなりぬる

同二十

おしなべてうき身と まも こそ なるみがたみちひるまはのかれるのみかは

二に「まもとまもといふ意

命四 ことわりやかた野の小野にさくきいす さこそ ところの人をつらけれ

千六 いづのまにかけひの水のこほるらん さこそ 嵐のかどのかひらめ

新八 なきあとの面影をのみ身にそへて さこそ 人の戀しかるらめ

新勅五 定家卿 まぐれつゝ袖だにはさぬ秋の日に さこそ みむろの山をそむらめ

新五 もみぢ葉を さこそ あらしのそらふらめ此山本もあめとふるなり

三に さこそ いかにと心得て聞ゆる さこそ

金七 あさましやなどかきたゆるもしは草 さこそ かわまのすさみなりとも

千十二 こひまなばわれゆゑとだに思ひ出よ さこそ ところさこゝろなりとも

草まくら さこそ 旅のどこならめけさしもたきてかへるべしや

秋にあはず さこそ 葛のいろづかめあならめしの風のけしきや

山ふかく さこそ こゝろをかよふともすまであわれのまらんものは

これらの さこそ 初學の耳に さこそ か聞どりがたし。されば本より
いかにといふ意に さこそ あらざれども さこそ やうに心得ると さこそ 聞どりがたし。

「さこそ のあまのすさみなりともは「いかにあまのすさみなればとも
と心得て聞え。」さこそ のつらき心なりともは「いかにつらき心を
とてとも心得て聞え。」さこそ の旅のどこならめは「いかに旅のどこな
ればとも心得て聞え。」さこそ のくすの色づかめは「いかに葛のいろ
づけばとも心得て聞え。」さこそ の心を通ふともは「いかに心にかよへ
ばとも心得て聞ゆる也山家集に「あながちに庭をさへふく嵐かなさ
こそ心に花をまかせめ。これも「いかに花を心にまかせればとも心得
て聞え。又「あだにちるさこそを梢の花ならめすこゝろのこせ春の山風。
これも「いかにあだにちる梢の花なればとも心得てよくきこゆるな
り

新四 くらひかね さこそ 露のまげからめやとるか月の袖のせばきに

これ さこそ どおしとかる意歎。又「いかに露のまげればとも心得
る方歎。さだめがたし。いづれにしても下句との さこそ 合はのかなり

同十五 人ならばおもふこゝろをいひてましよしや さこそ とまづのをだ巻

これ さこそ 下句の意聞えがたければ さこそ 意のも定めがたし

○ さこそ 下に さこそ の添たるも同じ

古十三 後拾十一 千十六 續十五 狭衣 金七 拾十五 後拾九 同十六 同二十 金三 新八

うつゝに之 **さもこそ** あらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ

わふと之 **さもこそ** 人めかたからめこゝろばかりのどけて見えなん

さもこそ 影とゞむべき世ならねどあどなき水にやどる月かな

戀しさは **さもこそ** あらめ春にと又つらさかたにも忘れざるらん

うきふし **さもこそ** あらめねにたつる此ふえ竹とかなしからずや

件の歌 **さもこそ** **さもこそ** **さもこそ** とうつゝにつらさこゝろなりども

夢にだにあふと見えよ **さもこそ** **さもこそ** 逢見んのかたからめわすれずとどあひふ人のなき

さもこそ 心みやこのほかにやどりせめうたて露けき草まくらかな

さもこそ 心くらべにまげざらめとやくも見えし駒のあし哉

さもこそ 宿をかたらめすみよしの松さへ杉になりけるかな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

さもこそ 心みやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬる袖かな

後九 後拾四 金三 古十五 拾二 同十六 同十九 後拾七

○まかと結ぶ格 此まといとゆる過去のまにて下にかの添たる也。かど疑ひのかにあらず。軽く開ゆ。此か清てよむべし。濁るひがと也。あひも見すなげさもそめす有し時おもふと **こそ** 身になかりしかまつ島やをしまの磯にあさりせしあまの袖 **こそ** かくのぬれしか有明の月もわかしの浦かせに波ばかり **こそ** よると見えしか

花すゝき我 **こそ** またに思ひしかほに出て人にむすばれにけり

春かけてきかんども **こそ** おもひしか山ほどいぎすおそく鳴らん

さきしどきなほ **こそ** 見しか桃の花ちるの惜くぞねもひ成ぬる

まのびつゝよる **こそ** さしかから衣人や見んどの思とざりしを

まぬばかりなげきに **こそ** となげきしかいきてとふべき身にしわらねば

また

また

また

また

また

また

また

また

同
十九

たらしぬのとかなくて「こそ」やみにしかこのいづことて立とまるらん
にしかのめづらし。されど同じ過去のしなれば。格の同じ事也

こそどかゝりてまかど結ぶ格也。三轉の内^{ひも鏡第三}に在て。證歌の一の卷
に既に出せるを。今又別にかくあまた出せる故に。此格萬葉集よりとじめて。

二十一代集に之數えらす多く見えて。いとみやびやかある詞なるに。近き代
にのをさく此格の歌を見ざる故に。殊に世人にまらしめんとて也。

詞花一「きのふかも霞ふりしかまがらきの外山の霞春めきにけり。新後
撰十六「こそわりと戀しきまでの思ひしかつらきにだにもぬる袖哉。

これら「こそ」といえずしてしかど結べり。詞花の歌の古今の「きの
ふこそさなへどりしか云とど同じ意なれば。こそにてよろしきを。かも

と改めたる中よにわるし。新後撰なるも「戀しきこそといひて宜しき
を。さりあらぬ也。にもこの重なるをいとひてにや。されど「まをとい

へるも猶いかにぞやおぼゆ。又續古今四慈鎮「なみだよりかつく袖に
露ちりてまらしか人の秋の初風。此しか心得ず。又土左日記の詞に「一
もじをだにまらぬものしかあしり十もじにふみてぞあそぶ。此しかいと

めづらし

○ましかど結ぶ格 此かもまかのかに同じ。清てよむべし

赤染 衛門集 をしむにし花のちらすばけふもたゞ春ゆくと「こそ」よそに見ましか

金 四 としくれぬとばかり「こそ」ときかましかわがみのうへにつもらざりせば

千十四 和泉式部 まつとでもかばかり「こそ」をあらましか思ひもかけぬ秋のゆふぐれ

○まど結ぶ 附からしけらし

後 八 もみちばいをしき錦と見しかども時雨と共にふりて「こそ」こし

十九 長歌 こだかき陰とあふがれん物と「こそ」見し云々

これらまかど結べると同意にて。かといえず。たゞしどのみいへる也

また

新後撰 八 れどに「こそ」ふく共きし秋風の袖になれぬるまら川のせき

風十三 後京極殿 われど「こそ」ながめなれにし山のとにそれも形見のあり明の月

これら「しど」受たれども切れずして猶下の言へつゞけり

古 四
同 五

秋の夜之露 [こそ] とに寒からし草むらぶとにむしのわぶれば

霜のたて露のぬき [こそ] よわからし山のにしきのぬれのかつちる

これらのからしと結び。此し過去のしにあらす。からんを轉じて

からしといへるなり。又

後 六拾

かもめ [こそ] よがれにけらしるな野なるこやの池水うとどほりせり

はのふぐと春 [こそ] 空にきにけらし天のかぐ山かすみたなびく

これらのからしと結び

また

後 八

こほり [こそ] 今のすらしもみよし野の山のたきつせ聲も聞えず

これららしもと結び。すべてらしも萬葉におほかる辭也。そもく

こそとかいりてらしと結ぶ格。一の卷三轉の次に證歌を出せり。是の

その下にも添たるなり

○をど結ぶ格 をいふ意のをなり

千 十一

よそ人にとりぬるかな君に [こそ] 見せばやとおもふ袖のまつくを

また [こそ] 人のこゝろもうつろふを色に見せたる山ざくらかな

五社百首
俊成卿

夢に [こそ] みやこの事も見るべきを袖に波こすちかのしほがま

新 十三

またにこそかよひし物をいかにしてはのうきすのうき名たつらん

同 十七

たえず [こそ] つかへし物をわが身よになどよむらん調のふち川

○にと結ぶ格

明ぬればつれなくなりぬ女郎花人まれず [こそ] をらんと思ふに

いにしへは月をのみ [こそ] ながめしに今日日をまつ我身なりけり

これらのにを力ありて。「ものをといふ意にちかし。又金葉の歌の間に
まもじわれば。まど愛ながら切れずして下へつゝ格にも入べし。又ま
みをまかど云てもよき歌也

○ともど受る格

後 十六 せきいれたる名こそ流れてどまるとも絶ず見るべき瀧の糸かた

千 十三 すがたこそ寐覺の床に見えずとも契りし事のうつゝなりせば

新勅十四 元真親王 わさくこそ人に見るとも關川のたゆる心はあらじとぞ思ふ

續後撰 十四 こゝろこそちぎりしましにかゝるとも同じ空なる月や見るらん

○とも又ど受る格

後拾 十九 信濃なるそのとらにこそあらねどもわがこゝろさきと今頼まん

新 十六 和歌の浦に家の風こそなけれども波ふく色と月お見えけり

續後撰 十七 ちぎりこそなほ山陰にまづめども心にうかぶ月を見せばや

續後拾二 中務 逢坂とあづまぢとこそ聞しかどこゝろづくしの關にて有ける

後拾 十三 ちぎりこし君こそとひすなりぬれ宿に絶ぬまつ虫の聲

玉十三 辨乳母 こゝろこそうきよの岸をとなるれどゆくへもまらぬ海士のうきよを

○こそにてにをはとゝのそざる歌

後 十六 あそれてふとこそつねの口のとにかくるや人をおもふなるらん

新拾遺 十七 かりにこそとさかくのりのことわりにとまうて人や猶まよふらん

これらの歌こそを
受たる辞なし

六帖 こむといひてこざりしよるも有しかばまたぬしもこそまつにまされる

蜻蛉 日記 萬代をよぶふ山べのゐのこそ君がつかふるよとひなるべし

榮花 玉のかさう わかれにし玉はかへすにかたけれどなみだのみこそ袖にかゝれる

これらに結び辭たがへり

信明 集 としふればわすれやせんと思ふこそあひ見ぬよりも我のわびしさ

こそどかゝりてきと結ぶ事。日本紀萬葉の歌に例あれども。古今集よ

りこなたに絶て見えず。聞よからぬもの也。

風 七 ぶてもともとれぬ今またつらし夢なれとこそいひし物から

これの下に過去のし有て切れざる格にとづれざれ共
猶とゝのそぬ歌なり

千五百
番

あふとは夢にのみこそならひきてうつゝ共なきこよひきりけれ

これのけれと留りたれ共。こそこの辭けれ迄へのかゝらず。此歌のけれ
の。「こよひにこそ有けれといとざればかならず。もし又「夢にのみこ
そといと。三の句を「ならひきてつれとやうにいとざればかならずすべ
てその結び辭の有ても。おき所によりて。上のでにをこそかけあえざる
と。是にてさざるべし。初學の人の歌に。此誤りつねにあると也。

同

夏をつるかも河原のみそぎこそ神やうくらん秋風のことる

これのらんと結べるがたがへるのみならず。間に疑ひのやもじさへあれ
ば。いみじきひがとなり。然るに此歌勝にけるの。いかなるそにか心得
ぬわざなり。

右の歌ともいづれもこのとへのひわろし。大かたこそこの結びと。上にわけ
たる如く。三轉の外にも種々あるとなれども。其例にうつれてみだりによむ
とさと。必ひがとあるわざ也

と

○どのすべて切るゝ語をつゝくるてにをと也。さる故に。上のでにをこのとへのひと。
大かたとより下への及ばざる也。猶それに種々の格あり。左にさるすが如し。
○定まれる格にて切れたる語をつゝくと

後拾
六

おなじくぞ雪つもるらん^とれもへども君ふるさとのまづごととるゝ

金
二

いなり山たづねや見まし郭公まつにさるしのなき^とおもへば

古
一

春やとき花やおそき^とさゝわかんうぐひすだにもあかすも有かな

同
二

ひとめ見し君もやくる^とさくら花けふとまら見てちらばちらなん

同
八

えぞしらぬ今こゝろ見よ命あらば我やわするゝ人やととぬ^と

同
十五

わがごとく我をおもとん人もがなさてもやうさ^とよをこゝろ見ん

同
十七

かゝ見やまいざ立よりて見てゆかんとしへぬる身のれいやまぬる^と

後
六

秋の野におく白露をけさ見れば玉やまける^とおどろかれつゝ

古
三

あし引の山はとゝぎすをりこへてたれかまざる^とねをのみぞ鳴

同
十七

住よしのさしのひめ松人ならばいくよかへし^とどのまし物を

古十九

後三

身のすてゝこゝろをだにもとふらざるじつひにひかりなるとあるべく
 ともにこそ花をも見めとまつ人のこの物ゆゑに惜き春かな
 右のたぐひ。上にぞのや何こそといひて。おのゝその定まりの結び辭
 にて切たるを。と受てつゞけたる也。ともなどの下のとも。これに准
 へてあるべし

○定まれる結び辭の格をたがへて受たると

後十一

續千六
家隆卿

新千七
敦忠卿

拾五

後拾十一

眞名
いせ物語

みるめかるかたぞあふみになしとさくたまをもさへやあまはかづかぬ
 かねの音に今やあけぬとながむれば猶雲ふかし岸のまら雪
 うちつけにかもひやいづとふる里の忍ふ草してすれるなりけり
 色かへぬ松と竹との末のよをいづれ久しと君のみぞ見ん
 おく山の眞木の葉まのきふる雪のいつとくべしと見えぬ君哉
 いづくまでおくりのしつと人とのわかぬわかれのみみだ川まで
 右の歌ども。上にぞや何などの辭われ共。その結び辭の格をたがへて。

と受たり。此格のなべての事にあらず。其歌のさま詞のまらべにま
 たがひてよくもあしくも聞ゆべし。重家朝臣家の歌合に「れのづからあ
 ふにやかふと思はずば戀に身をまげつべきかなといふ歌を。「あふ
 にやかふといへる程。もじのたらぬにやあらんと。俊成卿の判に見えた
 るの。「かふるといとでり。やの結びにあらず。るもじのたらぬ故に。
 おのづからもじたらぬやうに聞えたる也。されど右にあげたる如く。此
 例も多かれば。深き難どのすべからず。又菅家万葉下卷に「山澤の水な
 さとこそ見え渡れ秋の紅葉の落てかくせば。これの上のといひて「な
 さといへる。結びの格かなひたれども。かへりてきもじ耳にさへりて聞
 ぐるし。「なしといとん方まされり。

○詞を零さ意をふくめて受ると

古四

同八

同十五

拾二十

いつととのときわめかねを秋の夜ぞ物思ふとのかぎりなりける
 まひてゆく人をとめんさくら花いづれを道とまどふ迄ちれ
 わすれ草なにをかたねと思ひしつれなき人のこゝろなりけり
 世中にあらましかばとかもふ人なきがおはくも成にけるうな

これら△の志るしのとこに詞をとらきて
その意をふくめてとと受たり

○何等の下をとと受る格

古 十一 夕月夜さすや岡べの松の葉のいつと。もわかぬ戀もするかな

後 一 いつと。も春のひかりのわかなくにまだみよしの、山之雪ふる

古 十四 秋風に山の木葉のうつろへば人のこゝろもいか。ぞ思ふ

同 十八 みやこ人いかに。とりの山たかみこれぬ雲るにわぶとこたへよ

また

古 四 いつと。と時とわかぬ秋のよぞ物思ふとのかぎりなりける

新 十三 なにゆゑと。おもひもいれぬゆふべたにまち出し物を山端の月

右のくさぐさの格をもいづれも上のでにをこのとりのひのとの下へと及ばす

○上のでにをこのとりのひのとの下まで及ぶ格

古 六 雪ふれば木毎に花を咲にけるいづれを梅と分てをらまし

古 十六 たれ見よと。花さけるらんまら雲のたつ野と早く成にし物を

後 十八 いづくと。てたづねさつらん玉かづらわれのむかしの我ならなくに

新 十一 みかの原わきて流るゝいづみ川いつ見さ。てか戀しかるらん

同 十七 時しらぬ山はふじのねいつ。てかかのこまだらに雪の降らん

六帖 さいふきてこよひばかりを旅衣いくよへぬ。か袖のひづらん

此たぐひ猶いとおほし

○と二三つある歌

古 三 くるゝか。見ればあけぬる夏の夜をあかず。やなく山はとゝきす

後 拾 一 いかねておくるあしたにいふとどきさのふをこぞ。けふを今年と

後 十 わりなし。いふこそかつとうれしけれなるかならず。見えぬ。思へば

○とての意のと

古 一 くる。とあく。とめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん

此二つのと。「暮とて」「明」とていふこゝろ也。「くるゝ與あくる與

といふ意にあらざ。興の意の時と「くる」とあくるをいふ格也。拾遺十二「日のうちに二たひものをおもふかなとく明ぬるとれそくる」と。これにて知べし。
なほ此格のけぢめある事。下にくとしくいへり。

古五 ほにもいでぬ山田をもる 〇ふぢ衣いなばの露にぬれぬ日ぞなき

同八 物おもふ 〇過る月日もまらぬまにこそしもけふにくれぬとかさく

〇とも^〇の意のと 〇とも^〇の雖の字の意也

金七 たちながらきたり 〇あそび藤ころもぬぎすてられしみぞと思へば

新十三 たのめずば人をまつちの山あり 〇ねなまし物をいさよひの月

かげろふ日記 あらしのみふくめる宿に花すゝきはに出たり 〇かひやあからん

堀川後百首 ぬぎもこがあふみなりせばさう 〇わがふみも見てましとるさの橋

同 ぬにかく 〇筆も及ばじをどめこが花のすがたを誰に見せまし

抑濁るともを畧さてとといふのつねにて。事もなきを。右の如く。清むともを畧さてとへ入る。いとやしげにて聞にくし。右にその例ま

れなると也。好ましからぬ辭になん

〇一つのとも

後十五 あし引の山にねひたるまらかしのまらじな人を栲木なり 〇も

後拾十一 いのねまはまだまらじかしかぎりなくわが思ふべき人ぞわれ 〇も

新十七 れく山のこけのころもにくらべ見よいうれか露の置まざる 〇も

後後六 むかしぐに猶ふるさとの秋の月まらすひかりのいくめぐり 〇も

これらのとも。つねの雖の字の意のともを別にして。たゞとにもの添たる物にても輕し。さる故にととといひてもたがひさるなり

〇一つのとも

古十一 まるしなきおもひやきぞ 〇あしがきのまぢかけれ共あふよしのなき

此なとをたななどにて。とに意なし。此と外に例なしめづらしき辭也。六帖に「なにごと有てもとととと」。又後撰十是則「まるしなき思ひやなぞとあしたづのねになくまでにあえずわびしき。上二句全く右の古今の歌と同じ。但しこれの「なぞとねになく」といふ意か共聞ゆ。もしその意

ならばつねのとなり

同五 わがさつる方もまられすくらふ山木このこのちりとまがふに

貫之集 こじと思ふこころをなさをさくら花ちるとまがふにさけるなりけり

此ともめづらし

〇一つのとも

後十四 わがためにかつりつらしとみ山木のこりとまこりぬかゝる戀せじ

同十八 よのちかひいさとまいさや風の音と秋に秋そふこちこそすれ

此ともり。同じ言を重ねてつよくいふとき。中にささめり。日本紀の歌にも「うづまさの神とささくるとこよの神をうちさたますもと見え。源氏物語玉かづらの巻の詞にも「うれしともうれし有。

〇相對へていふと 與の字の意也

これの「夏と秋と。」「君と我となど。」「相對へていふとにて。ことなる事なし。但し常のてにをこのとと。上を切る、格の辭より受るを。此事前にくとしくいへり此とつやく格の辭ひもかゝ見中より受る定まりなり。

古三 夏と秋とゆさかふ空の通ひちりかたへすやしき風やふくらん

かやうに二方ともにといふとつねなり
また

同 ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹とわがぬるとこちつの花

かやうに一方にのみいふもおほし
また

新十八 ながれ木と立まらなみとやくしほといづれかからさわたつみの底

かやうに三つなともいへり
また

同四 月影のそつ秋風とふけゆけばこころづくしに物をこそ思へ

これの「初秋風の方にのみと、いひて。「月影の方への。のといひてとといとさる。月影の方を主としていへる故也。此例もおほし

〇とも 三の巻への部に出せり

〇ともよ この巻への部に出せり

○おはよそとの上と。切る、格の辭より受るが定まりなり。切る、格の辭とのひも鏡の右の行の段との辭なり
 一二例をいとも。「ありと云ふ」なしと云ふ「ありとやこいに云ふ」よをさいふが定まりにて。「あると云ふ」「なきと云ふ」といはず。「あり」「あし」切る、辭。「ある」「なき」とつゞく辭なり。下みなこれに准へ
 て知べし又「ありきと云ふ」「あかりきと云ふ」といふが定まりにて。「有しと云ふ」「なるりしと云ふ」といはず。又「なりと云ふ」「けりと云ふ」といふが定まりにて。「たかど云云」「けると云ふ」といはず。又「あくと云ふ」「いづと云ふ」といふが定まりにて。「あくると云ふ」「いづると云ふ」といはず。外もすべてこれらになすらへてまゐるべし。近き世の人と此けぢめを誤るとつねにおはし。
鳥まだ深きよの月に鳴也。同十九、いづる
 ともいる共見えて足引の山の尾上にすめる月影。風雅八「うすぐもりをりく寒くちる雪にいづるともなき月もすさまし新拾遺十四」さの國のあぐらの濱の忘貝我の忘れと年のふるとも。右の歌共みな。その上の受る辭の格たがへり。新拾遺の歌ハ万葉十一に在て今、本の訓ハ「我のわすれず年のふるれどもと有也。四。句「我とわすれじといとも。結句ハ必「年のへぬともとこいふべきに。「ふるともとあるハひがと也。又

新拾遺十四「あしたゆくくるてふ海士にこそハんのれなでのこる見るめありやと。是ハ古今の本歌をとりて。「くるてふ」とくるるとふふといふ意なれば。と受る格にて。「くてふ」といふべきぞ。「くるてふ」といへるハたがへり
 但し上にそのや何こそなどの辭あれば。その結び辭より受ると。上に出せる證歌をもの如し。

カ

○さの下へも添てどもといふ。かをかれともいひ。ぞをぞも
さもいふ類と同じもなり
 雖、字の意也。此雖、

字の意の言に清と濁とのかあり有。既に然る事をいふにハとどもと濁り。いまだ然らざる事をあらましにいふにハとどもと清といふ。此清濁りによりて上の受る言の格も異也。「花とさくともといふと。「花のさけどもといふとこれ也。外もこれにあらずらへてささるべし。二つともにてことなるともなきハ今出さず。清かたのさとの上の部の部に出せり。さて濁るかたにまかどもまかどといふと有

古
 十二 ねになきてひげにまか さも 春雨にぬれにし袖ととりこたへん

同 十八 人ふるす里をいとひてこまか を ならのみやこもらき名なりけり

新 十五 身にちかくきにける物を色かゝる秋をばよそにおもひまか を

古 十六 つひにゆく道どのかねてきくまか を きのふけふどの思ひざりしを

新 十六 むさし野は袖ひづばかりわけまか を わかむらさきの尋ねわびふき

千 十七 くらゐ山花をまつこそ久しけれ春のみやこに年へまか を

此まかりこそその結びのまかど一つなり。さてまかどもまかどなり。まかばと相對へる辞なり。

此外のまかどもいことある事もなし

を

○つねのをいことなるまなれば出さず

○やすめ辞におくを

古 十三 人といさわれとあき名のをしければ昔もいまもまらさ を いとん

後 十九 袖ぬれてわかれりすともかりころもゆくとなひひそきたり を 見ん

拾 十 ゆふだすきかゝるたもとりのわづらひしゆたけにとけてあらんと を まれ

後 拾 十九 よろづよを君がまもりといのりつゝ大刀造江のまらし を 見よ

玉 三 五月雨の月のほのかに見ゆる夜とはとくきすだにさやかに を なけ

古 四 萩が花ちるらん小野の露霜にぬれて を ゆかんさよふくとも

同 五 立とまり見て を わらんもみぢば一雨とふるとも水のまさらじ

同 十三 こひしくばまたに を おもへむらさきのねすりの衣いろにいづなゆめ

拾 三 よもすがら見て を あかさん秋の月こよひの空に雲なからなん

同 露けてわがころもてぬれぬともをりて を ゆかん秋萩の花

新 十五 君があたり見つゝ を をらん伊駒山雲なかくしそ雨のふるとも

○ものゝの意のを

古 四 ひどりのみながむるよりの女郎花わがすむ宿に植て見まし を

同 五 秋のきくにほふかきりはかざしてん花よりささとまらぬわが身 を

同 十 秋くれと月のかつらのみやひなるひかりを花とちらすばかり を

同十六 つひにゆく道そのかねて聞しかどきのふけふその思ひなりしを

同十七 うれしきをあにいつくまんからころもたもとゆたかにたてといたましを

同二 雪どのみふるだにあるを さくら花いかにちれど風のみくらん

同三 夏の夜たまだよひながら明ぬるを 雲のいつこに月やどるらん

同五 まら露の色をひとつを ナルモノヲいかにして秋の木葉をち々にそむらん

同十一 人の身もなふりしものを ナルモノヲあらずしていさころみんこひやまぬると

同十二 今のこやこひまなましを あひ見んと頼めしとそ命なりける

右のたぐひのをいふ意也其中になるといふ言を加へてなるも
のをといふもありそれも意の同じ

○にお通ふを

古六 花のいろを雪にまじりて見えず共か をだむにはへ人のまるべく

後拾八 みやこいつるけさばかりだにこつかにも逢見て人 をわかれましかり

古今集の詞書などにも此をあり萬葉の歌にも有

○一のを

古七 めづらしき聲ならなくに郭公こいらの年 をあかずも有かな

同十五 あふと をながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

これのあふとをこひわたるといふ意にあらす。あふとなしといふに
かけ也

に

○つねのにこそなるをななければいださず

○にきにしにけりにけんにたりにしかな

此たぐひのに万葉に去字をかけり來にて「なりにてなどのに」も同じ
また

後拾十三 中々にうかりしまいにやみ にせばわする程になりもまなまし

玉九 経盛 くやしさをそふばかりだになれ にせばわするまでにとりざらめやと

新千九 道綱母 深草の野べのけぶりとなり にせばいつれの雲を分てとたまし

万十二 神無月雨間もおかずけり にせばたが里のまに宿かからまし

赤染衛門集

玉ぼこの道のそらにてきえにせばうきとわりとたれかつげまし

これらのにも同じ。猶此にもじの事。六の巻なるぬぬるの部にくひしく
いふを考へあてすべし

○ものをといふに近きに

古十五 それをだにおもふとてわがやどを見きとないひそ人のきかくに

同十七 ぬさみだる人こそ有らしまら玉のまなくもちるか袖のせばきに

後七 秋の野のにしきのこと見ゆる哉色なき露こそめじと思ふに

万十五 青によしならの都にゆく人もがも草まくら旅行輪のどまりつげんに

新三 有明の月とまたぬに出ぬれどなほ山ふかきほどきすかな

同 庭のおもはまだかわかぬに夕だちの空さうげなくすめる月かな

右のたぐひのにひちから有てつねのにもじにことなり

○なくに

古二 さくら花ちらばらなんちらすとて故郷人のきても見なくに

同十四 みちのくのまのぶもちずり誰ゆるにみだれんと思ふ我ならなくに

同十七 たれをかもえる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

同二 春雨にははへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶさのとな

同十九 むつごともまだつきなくに明ぬめりいつらの秋の長してふよの

○なしに

古十一 淺茅生の小野のまの原忍ぶとも人えるらめやいふ人なしに

万四 てる月をやみに見なしてなく涙ころもぬらしつはす人なしに

古二 とつむべき物とはなしにとかなくもちる花ごどにたぐふ心か

同三 ほどきす我どのなしにうの花のうさよの中に鳴わたるらん

○二つのに

新二 春雨をいたくなふりそさくら花まだ見ぬ人^{新二}にちらまくもをし

これの萬葉より出たりかの集にのなほ此たぐひのにもじこれかれあり

○二つのに

玉

また秋のうれへの色にむかふなり尾花が風に庭の月影

同

あれわたる庭を千くさに虫の聲かきはつたのふるさとの秋

同

うれしきにうきとそひけるならひかなまぢ見し霄に今の別路

かやうにこれとかれと二つ事をいひたつる間にとさめるにもじ。いやし
げに聞ゆる物也。又似たるとながら。風雅五後京極殿物思へどするわざ
ならし木間より落たる月にさをしかの。聲此たぐひとわろからず。月に
鹿のなくをいへるにて月と鹿とをならべていひたてたるにあらざれば
なり

〇二つのお

風

さくらばないぢや手ごとをたをりもともお千年の春にかざらん

新後拾

八

秋に見し色もにはひもそれながら霜おのこれる庭のまら菊

此たぐひのにもじ殊にいやくしく聞ゆ。「秋に見しなごり。近き世にいつ
ねの事になりぬれど。古き歌にみ見えざると也。これに必「秋見しとい
ふべきことなるを。さてりもじたらす。やむとえずば「秋見しとこそ
いむめ。式子内親王の「春ににかすめるよのけしき哉なごり。かすみて春
のけしきになれるよしなれば意異也

〇なにせんに 四の巻何の部に出せり

〇かに 四の巻かの部に出せり

て

〇つねのてのいことなるをなし

〇てきてしてはてよてんてけんてましてしがなてけり

右のたぐひのていつの轉用也。此事六の巻つづるの部に委くいふを考ふ
べし。〇てけりといふ時にけを濁りてよむひひがま也。濁るべき

後

かくながらちらてよをやとつくしてぬ花のときりも有と見るべく

此ても右のてど一つなり。此歌上句の「さくら花春くと入れ年だにも
人のこゝろにあかれやせぬといへる歌の下句と同一格のてにをを也

〇にん

新

よの中をこゝろだかくもいとふかなふじのけありを身の思ひおて

後十四 おもひつゝへにけるとしをまるべ [にて] ちれぬる物とこゝろきりけり

同十八 今こんどいひしばかりをいのち [にて] まつにけぬべしさくさめのとど

拾十八 こむらさきたなびく雲をまるべ [にて] くらゐの山の峯を尋ねん

同 まつがえのかよへる枝をとぐら [にて] すだてらるべきつるのひな哉

同廿 ひどなしむねのちぶさをほむら [にて] やくすみ染の衣きよきみ

後拾十 ささにたつなみだを道のまるべ [にて] われこそ行ていとまほしけれ

新四 深草の露のよすがをちぎり [にて] 里をばかれず秋ときにけり

同 身にとまるおもひを萩のうら [にて] 此ごろかなし夕暮のそら

かくのごとく上にをどかゝりてあてといふ。一つの格なり。此外つねの [にて] ことなるをなし

○すて [す] ずしての意也

古今序 さく花に思ひつくみのあぢきなき身にいたつきのいるもまら [す] て

拾十一 浪間より見ゆる小島のとまびさし久しくなりぬ君にあと [す] て

古四 秋萩をまがらみふせてなく鹿のめいの見え [す] て 音のさやけさ

後二 君こ [す] て 年のくれにき立かへり春さへけふに成にける哉

同六 万八 わがやどの尾花がうへのまら露をけた [す] て 玉おぬく物にもが

○てへ

古十八 今さらおとふべき人もおもはえせ八重むぐらにて門させり [て] へ

拾十七 ひかしより名高きやどの言の葉とこの本にこそ落とまる [て] へ

同十八 我のみや子もたる [て] へ 高砂の尾上にたてる松も子もたれ

六帖 こひ [て] へ ばまらぬ道にもあらくにあやしくまどふわが心かな

これらのとていへをつつめててへといへる也といふをつつめててふといふ [にて] 心得べしさて是にての部に入べき辭に非れ共まばらくてもとによ

○てと [] 三の巻ばの部に出せり

○てよ [] 五の巻よの部に出せり

○なとて [] 四の巻何の部に出せり

濁

○でいずしてのつしまりたる辭也。つねのでことなるとなし

○なで 此なはんんなどのなと一つにて。去の轉じたるなり

古十三 見るめかるわが身をうらとまらねばやかれ なで 海士の足たゆくる

後十八 かひもなき草の枝におく露のなにきえ なで 落どまるらん

拾八 うさよふとゆきかくれ なで かきくもりふるの思ひのほかにも有かな

新六 中々にさえのきえ なで うづみ火のいきてかひなき世にも有かな

同八 おもへ君もえしけふりにまぐひ なで 立おくれたる春のかすみを

同十五 つらからば戀しきとわすれ なで そへてのなごかまづ心なき

同十八 つきもせぬひかりのまにもまぎれ なで おいてかへれるかみのつれなさ

同十二 もしはやくあまのいそやの夕けふり立名もくるし思ひたえ なで

金葉三「天の川かへさの舟に浪かけでのりわづらひ程もふばかり。此でもなでの意なり

な

○「けりな」「けらしな」「じな」「わすれじな」「まられ」「ばやな」「見せばやな」「ゆかばや

「がもな」「かしな」「よな」「さぞな」「あれな」「かなしな」「つらしな」「ちぎりきな」「のた

ぐひ猶おほし 千五百番に「おもむすな。夫木俊頼歌に「うれしやな。同顯昭 又萬葉に

と「んちといへるおほし。古今よりこなたに此例なし。又「たまへな」「まぎらひし

もな」「音高しもあなとも有。「うべな」の古事記の歌にもあり

後十三 人ぞどのたのみがたさは難波なるあしのうら葉の恨みつべし な

同十四 世中には有明のつきなくてやみにまどふをとりぬつらし な

拾七 秋風によもの山よりたのがじふくに散ぬる紅葉かなし な

後拾八 天の川後のけふだにこるけきをいつ共まらぬ船出かなし な

いせ 物語 いとあそれなくぞ聞ゆるともしけちさゆる物とも我のまらす な

これら「あ」とちめたる歌也

○なば三の巻ば此巻のなましなくんなばや右の類のなとぬ活らさたるにて去の意也。此事六の巻のぬぬるの部にくいふを考へあとすべし

○十一 道まらでやみやとしなぬ逢坂の關のこなたのうみといふなり
此なも同じな也

○無きの意のな

古十一 人めもる我かそあやな花すいきなどかほに出て戀すしもあらん

後七 いづかたに夜を成ぬらんなばつか明ぬかぎりの秋ぞと思えん

拾三 ひこぼしの妻まつよひの秋風に我さへあやな人ぞ戀しき

此なの猶いとおほしなずらへまるべし

○勿あの意のな

古三 夏山になくはといきす心あらば物思ふ我に聲あきかせそ

同四 もくさの花のひもとく秋の野に思ひたまいん人などがめぞ

新九 すやしさいいさのまつ原まさる共そふる扇の風なわすれそ

古一 春日野とけふあやさそわか草のつまもこもれり我もこもれり

同 山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見とやさん

同五 こひしくと見てもまのばんもみぢ葉をふきなちらしそ山おろしの風

壬二集「春の花秋の紅葉も見て過し心な戀にいたくだきそ此歌のなも
じのおき所あしくていかにぞや聞ゆ。「いたくなくだきそといふべき定
まり也。また

万七 妹があたりわが袖ふらん木間よりいでくる月に雲なたなびき

同十七 我なしとなわびわがせこ郭公なかんさ月之玉をぬかさね

これらの下にそもじなし。此外も萬葉にこ此例おほし。古今よりこなた
には見えず。又万葉にこ。その下へねをそへてそねといへるも多し。七
の巻古風の部に出せり。又十七の巻長歌にこ。「ねもころになこひそよ
どぞ云こ共よめる有。源氏物語若菜下の詞も。「つきいりならこなの
たまひそよどあり。また

新拾廿
重之集

ちりやふるいつしの宮の神のこまゆめなのりそやたゞりもそする

これの下にそやといへり。また

拾
十六

花の色とあかず見るともうぐひすのねぐらの枝に手ななふれそも

元輔
集

春がすみたちななよりそうすくこさ錦と見ゆる山のさくらに

これらななを二つ重ねたる。一つななあまりて聞ゆいかい。又拾遺の歌の。その下へもを添たり。此例と六帖にも。「雪なふりそも風なふきそもなを有。されどこれらなな万葉の歌を直して入たるにて。宜にあらす。また

古
二

山ぶさとおやななささそ花見んとうるけん人のこよひこなくに

これななも二つ重なりたれ共。上のなな無の意なればこと事也。又此歌の二の句を。「あやなくささそと書る本あり。寫し誤也。

○六帖「わがせこがふりさけ見つゝなけくらん清き月夜お雲たなひきそこれななを略きて下ななにとのみいへる。いみしきひがと也。下のその畧ける例われども。上のなを畧くとなな例も理りもなし。此歌の万葉十一に在て。結句雲莫田名引モナタナヒキとあるを直せる誤也。すべて六帖のうち万葉の歌をとれるになな。えもいとぬひがこと多さぞかし。さて夫木源仲正。「ち

○二つのみ

古
十一

秋の野の尾花おまじりさく花の色にやこひんあふよしをなみ

同
一

春のさるかすみのころもぬきをなうすな山風にこそみだるべらなれ

同
四

秋の野おやどりなすべし女郎花名をむつましな旅ならなくに

同
十三

ねぬる夜の夢をなこかななまどろめばいやなこかなにもなりまさる哉

後
六

秋の田のかりほのいはのどまをなあらな我衣手の露おぬれつゝ

万
八

春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をななつかしな一夜ねにける

後
五

天の川せいのまら涙たかけれなたゞ渡りさぬまつにくるしなみ

古
五

さは山のこゝその紅葉ちりぬべなよるさへ見よとてらす月かげ

りぬども外へとやりなをいろくの木葉めぐらす谷のつち風。同寂蓮。牛の子にふまるな庭のこたつぶり角あればとて身をばたのみそ。これらな歌も奇もじなし。皆ひがとなり近き世にも此誤をりく見ゆ。

な

右の外「ぬするな」うらむななどやうになを下にわくなことなるとなし

同 十四 かすく／＼に思ひおもえずとひがたみ身を去る雨とふりぞまされる

同 十五 ゆきかへり空にのみしてふるまのわがぬる山の風とやみなり

後 六 時雨ふりふりなば人に見せもあへずちりなばをしみをれる秋萩

同 七 藤ばかまきる人なみやたちながらしぐれの雨にぬらしそめつる

同 秋の月ひかりさやけみもみぢ葉のねつる影さへ見えわたるかな

右の外「風をいたみ」瀨をこやみ「春を浅み」「山高み」「秋ふかみ」「風とやみ」「冬さむ

みのたぐひの猶おほし上にをといへると。をもじなさと 又萬葉に「此みを用ひたるこ

と殊に廣くして。後の歌の用ひさまといさゝか異なるもねはし。「袖のわかれをかた

みして。「いふせみと。ともしみと。「戀をまげみと。などやうにもいへり。

古 十三 あさみこそ袖とひづらめなみだ河身さへながるときかばたのまん

これの浅き所をさして「あさみといへるやうに聞ゆれど。さにはわら
ず。此みも右の歌共のみと同じくて。「浅きにこそいふ意也。但し源氏
葵卷に「浅みにや人のかりたつ云々」とよめる。此古今集の歌を。浅き
とこの意と見てとれる也。○新編古今五経信卿「さとしかの聲のさやき

み聞ゆるのひとりやぬらん小野の草ぶし。此みとくを寫し誤れるなるべ
し。又風雅七「ぬれておつる桐の枯葉の音をおもみ嵐とかろき秋のむら
さめ。此みのひがま也

○一つのみ

後拾 一 難波がた浦吹風に涙たてばつのがむ芦の見えみ見えきみ

千 十二 みつしほの末葉をわらふ流れ芦の君をぞ思ふうさみまづみみ

後 八 神無月ふりみふらすみさだめなき時雨ぞ冬のとじめなりける

後拾 十三 みちのくのをたえの橋のこれならんふみみふまきみ心まどひす

万 十二 わづさ弓ひきみゆるしみ思ひ見てすでにこころとよりおし物を

此外「おひみいだきみ。又ゑみいかりみ。あきも萬葉にあり。又文にも「くもりみ

とれみ。又なきみわらひみなどおほし。又萬葉十八長歌に「をどめらにつとあもやり

み白妙の袖にもこきれかぐのし。みおきてからしみ云々かやうにもよめり 此中に「かぐ

上の「山高みなどのみにて。 中しみのみ

このみにわらず別なり また

万十八
長歌

菅家万
葉下
貫之
集

としきよしそのつまの子とあさよひにるみみゑますもうち歎き云々
あかずして君をこひつるなみだこそうきみまづみて有わたりつれ
おく山の見えみ見えぬと年くれて雪のふりつゝかくすなりけり
かくの如く上に一つみといひて。下に今一つをばいとぬもあり。されど
これのきよくもあらせ○菅家万葉下巻に「春の日に霞分つゝ行鷹の見
江濱見江濱も雲かくれつゝ。これの上の濱の字の必寫し誤りなるべし。
「見えみ見えすもと有べきと也

〇二つのみ

拾
十三

源氏
葵

後鳥羽院
集

夏草のまげみにおふるまろこ菅まろがまろねよくよへぬらん
あさみにや人とおりたつわがたの身もそはう迄深きこひぢを
雨をやむ雲のうすみを行月の影おほるる夏の夜のそら
これのまげき所をまげみ。浅き所をあさみうすき所をうすみといへる也

よ

後
九

たえとつるものさに見つゝさゝがにの糸をたのめる心とばさるよ

拾
十二

千
二

後
十九

拾
十

同
十二

同

同
十三

同
十七

後拾
十二

新
六

同
十四

春の野におふるなきなのわびしき身をつみてだに人のまらぬよ
けふくれぬ花のちりしもかくぞ有しふたゝび春の物をおもふよ
さらばよそのかれし時にいとませば我も涙におぼれなまし
おひしげれひら野の原のあや杉よこさむらさきにたちかさぬべく
ゆめよ夢戀しき人にあひ見すなためての後とわびしかりけり
かた岸の松のうさねと忍びしひさればよつひに顯れにけり
夏くさのまげみにおふるまろこ菅まろがまろねよくよへぬらん
秋風よたなばたつめにことゝとんいかなるよにかあそんとすらん
有馬山のなのさゝら風ふけばいでそよ人を忘れやりする
やよしぐれ物ねもふ袖のなかりせば木葉の後になにを染まし
たづね見るつらきころのおくの海よまはひの瀉のいふかひもなし
「世中よ」玉のをよ「ちかだしよ」なげかずよ「おぼえずよ」忘れよ「うらみずよ」
「まのばじよ」むすれじよ「むするなよ」ことゝへよ「もらすなよ」「ちらすなよ」のた

くひいとおほし。又二つ重ねたる

千十六 此ころのをしのうきねぞわかれなる上毛の霜下のこほりよ

○仰おほするよ

古四 萩の露玉にぬかんととればけぬよし見ん人の枝ながらみよ

同七 わがよのひ君が八千代にとりそへてとめわきてば思ひ出にせよ

此たぐひいとおほし。また

古十六 みな人と花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ

新六 ながむればわが山のこに雪まろしみやこの人よあわれ共見よ

狭衣 早き瀬のそこのもくずと成にきとあふぎの風よふさもつたへよ

これらよ二つ有て。上なるよ呼出すよ。下なるよ仰するよ也。○玉葉十
「なきなげささも人こひてながめしと思ひ出よ」夕暮の空。かく重なれ
るよひがと也

○つよ

古四 ひさかたの天の川原のわたし守君わたりなばかぢかくしてよ

新十三 たのめおかんたいさのかりをちぎりにてうきよの中の夢になしてよ

伊勢物語 彦星に戀とまさりぬあまのがとへだつる關を今のやめてよ

新十一 いせ集 なにはがたみじかき芦のふしのまもあこで此世を過してよとや

後拾十六 いのりけんこと夢にてかぎりてよさても逢てふ名こそ惜けれ

詞十 かくてのみよに有明の月ならば雲がくしてよ天降る神

万二十 はとぎすこにちかくをきなきてよ過なん後にさるしあらめやも

○とよ

古三 やよやまて山はとぎすことつてんわれ世中にすみわびぬとよ

万廿 わが妹子がまのびにせよとつけし紐いどになる共わのとかじとよ

堀川百首 さくら花山路も見えずらりにけりこれより春のくれゆくとよ

金八 あささしやこのきにさとのさまでとよ戀せよとても生れざりけり

新十五 夢かとよ見し面影もちぎりしも忘れずながらうつらねば

狭衣 夢かとよ見しにも似たるつらさかなうきとためしもあらじと思ふに

○よな

拾三 長月の九日ごとにつむ菊の花のかひなくおいにける **よな**

狭衣 同じくひきせ **よな** あまのぬれ衣よそふるからににくからずやと

同 かすめ **よな** おもひきえなんけぶりに立おくれてゆくゆらざらまし

ね

後十 おもえんと頼めしことも有物をなき名をたてた々に忘れ **ね**

拾十五 あふとは心にもあらずつらくともさやの契りし忘れ **ね**

後十三 わすれ **ね**といひしにかなふ君なれとぬえつらき物にぞ有ける

同十九 君が代を鶴の期にあえてき **ね** 來さだめなきよのうたかひもなく

拾十一 あふを月日あそへてまつ時とけふ行末になり **ね**をぞ思ふ

同十六 春風の花のなきまにふきこて **ね**さきなば思ひなくて見るべく

新十一 玉のをよたえなばたえ **ね**ながらへば忍ぶるとのよわりもぞする

同十二 きえ **ね**たゝ忍ぶの山の峯の雲かゝるころのあともなきまで

此 **ね** のいとゆる畢 **ね** の活用けるにて。仰する辭也。○新撰撰十四玉葉十
一千五百番歌合定家卿歌などに「わすれ **ね** よとよを添てよめる有。聞よ
くもあらず

○さねそね これらの古今集よりこなたにの見えす。七の巻古風部に出せり

し やすめ辭

○やすめ辭の **ま**

古一 こゝろがし深くそめて **ま**をうければ消あへぬ雪の花を見ゆらん

同 年ふればよひひとおいぬまかひあれ **ま**花を **ま**見れば物思ひもなし

同二 まてといふにちらで **ま**とまる物なら **ま**何を櫻におもひまさまし

同 のころなくちるぞめでたきさくら花在てよの中 **ま** の木うければ

同 春雨のふるひなみだかさくら花ちるを **ま**しまぬ人 **ま**なければ

同 いつまでか野べに心のあくがれん花 **ま**ちらきばちよもへぬべし

同 散花のなくに **ま**とまる物ならば **ま**われうぐひすにおとらましや

同 ふく風とたにの水と **ま**なかりせばみやまがくれの花を見ましや

古二 をしめどもとまらなくに春霞かへる道に^五たちぬと思へ^六
 同四 秋の夜の月のひかり^七わかければ^八くらふの山もこえぬべら也
 同六 故郷とよし野の山^九ちかければ^{一〇}一日もみ雪ふらぬ日^{一一}なし
 同八 おもへども身を^{一二}分ねば^{一三}めに見えぬ心を君にたぐへてぞやる
 同 からころもたつ日^{一四}きかじ朝露のおきて^{一五}ゆけば^{一六}ぬべき物を
 同 朝なけに見べき君と^{一七}たのまねば^{一八}おもひたちぬるくさまくらなり
 同九 名に^{一九}おとばい^{二〇}ごことい^{二一}ん都鳥わが思ふ人はありやなしやと
 同十 春霞中^{二二}かよひぢなかりせば^{二三}秋來る鴈をかへらざらまし
 同十四 ちいの色にうつろふらめども^{二四}まらなくに心^{二五}秋の紅葉ならね^{二六}
 古八 大方やすめ辭のま^{二七}。右の歌どものごとく。いづれも皆下にはと受たり。
 万八 よくく心をつけて語のまらべを味ふべし。これぞうちまかせたる格に
 十二 有ける
 古八 ちたのれてきにし心の身に^{二八}あれば^{二九}かへるさまにの道もまられぞ
 万十二 ねもふに^{三〇}あまりにし^{三一}かばすべをなみ我のいひてさいむべきものを

古九 これらに^{三二}し^{三三}二つ有て。一つのま^{三四}いとゆる過去のま。一つのま^{三五}やす
 古九 め辞也。また
 同十七 ほのく^{三六}と明石のうらの朝霧に島がくれゆく船を^{三七}ぞ思ふ
 同十七 ちりやふる宇治の橋守なれを^{三八}ぞあ^{三九}のれと^{四〇}思ふ年のへぬれば
 万八 たちばなの花ちる里のほど^{四一}きすかた戀しつ^{四二}なく日^{四三}ぞ^{四四}はさ
 同十五 此でろと君をおもふとすべもなき戀のみしつ^{四五}ねのみ^{四六}ぞ^{四七}なく
 古二十 これらに^{四八}ま^{四九}ぞとつ^{五〇}ける格なり。また
 古二十 わたらしき年のとじめにかく^{五一}こそ^{五二}千年をかねてたのしきをつめ
 古二十 これやこの天の羽でろも^{五三}うべ^{五四}こそ^{五五}君がみけしとたてまつりけれ
 古二十 これらに^{五六}ま^{五七}こそとつ^{五八}ける格也。なほ此格之萬葉におほし。また
 古二十 たれ^{五九}かも^{六〇}とめてをりつる春がすみ立かくすらん山のさくらを
 同四 けふより^{六一}今^{六二}こんど^{六三}しの昨日をぞ^{六四}いつ^{六五}か^{六六}とのみま^{六七}ち渡るべき
 同十二 あづま^{六八}ちのさやの中山なかく^{六九}になに^{七〇}か^{七一}人をねもひそめけん
 同十三 たきつ瀬の早きこ^{七二}ろをなに^{七三}か^{七四}も^{七五}人めづ^{七六}みのせきと^{七七}むらん

古十一 これらの何等の下におきて。かもじとの間にたまめる格也。また秋の田のはにこそ人をこひざらめなどか心にわすれまもせん

同 人めもる我がはあやな花すきなどかほに出てこひずまもあらん

同十四 月夜よしよしと人につげやらばこてふにくたりまたずまもあらず

同十九 うめの花見にこそきつれうぐひすのひとくくといとひまもをる

後九 わたつ海に深きこころのなかりせばなにかえ君をうらみまもせん

後拾五 きくにだにこころとうつる花の色を見にゆく人とかへりまもせじ

源氏若紫 立とまり霧のまがきのすぎうくば草のどざしにさりりまもせじ

古四 わがためにくる秋にまもあらずに虫のねさけばまづそかなしき

同十五 秋風之身を分てまもふかなくに人のこころの空になるらん

同十七 かぎりなき君がためにとる花と時まもわかぬ物にぞ有ける

同十八 いくよまもあらず我身をあそもかくあまのかるもにおもひ亂るゝ

後十七 たらちめのかくれとてまもうば玉のわが黒髪とてせや有けん

これらにまもどつゞける格也。但し此まもに。もといふべき所に。まを上によすめ辭における物にてもいつねのも也。まも二も共によすめ辭なるに。別に下に出せり

古十五 いままもどわびにし物をさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる

これに古風の格にて。萬葉お例あり。萬葉に「今しとしど。やすめ辭のまを二つかさねておけやと有あり

ねはよそやすめ辭のまもじの格。萬葉に「猶さまぐおほくありて。七の巻古風の部に出せり。今も古風の歌をよまんに。それにならふべし然るに古今集よりこなたの。おのつから定まりあるが如くになりて。右に出せる格共にこづれたるに。をさく見えざれば。古今よりこなたの風をよまんに右の格をよく心得て守るべしみづりにおくべきにあらず

からころもきつくなれにしつままもあればとるくさぬる旅をまも思ふ

同九 たねまもあれば岩にも松とおひにけり戀をまこひばわとぞらめやと

これらに此まも二つあれども。いつれも右の格にこづれず近き世の人の歌を見るに。もじのたらの所に。みだりに此まもじをわけていともいやしけ

いせ
物語

なるがおほき故に。今殊に古歌をおほく引出て。其格を定めすなり
よそうみのあまを[ま]人を見るからにめくせよ共たのまるいかな
これの件の格どもにとづれたれども。よくとりのひて聞えたり。おのづ
からの事あり

新千
廿

我かくて君が七代にあふさかの關[ま]まざしき道ぞしらる

これの古今八「相坂の關しまさしき物ならばあかずわかるゝ君をゆめよ。
といふを本歌にてよめる故に。右の格共にとづれたれども。まもじわし
からず。もし本歌なくてかくあらんにいよろしからざるおきま也

○千載七「あわれとし思ひん人と別れじを心の身より外の物か。風雅
十九「わが君とまもらぬ神しなれども千世のためし住吉の松。これ
らのまの聞よくもあらず。玉葉十二「けふしたに契らぬ中のあふさを雲
るにのみもさゝ渡るかな。續千載十六「山をなほみ雪しふれどかげろふ
のもゆる野ばらの春のさわらび。これらのまもじのいといやしげに聞え
たり。今の人心すべし。

古
三

○まも
これの二もと共にやすめ辭也。上に出せるもに意あるまもとのかりれり
夜やくらき道やまもへるほどさす我やとを[まも]過がてになく

古
十三

今朝之[まも]おきけんかたもまらざりつ思ひいづるぞ消てかなしき

同
十四

たが里によがれをしてか郭公たこいに[まも]ねたる聲する

金
三

今之[まも]はに出ぬらん東路のいとたの小野のまのくをすき

古
三

これらのまものいさゝかも意なきやすめとばなり。また
むかしへやいまも戀しきほどさす故郷を[まも]鳴てきつらん

同
四

天の川紅葉をとしに渡せばやたなばたつめの秋を[まも]まつ

拾
十一

あまた見しとよのみそぎのもろ人の君[まも]物をおもとするかな

同
十二

夢のこどなどかよる[まも]君を見んくるまつまも定めなき世あ

同
十七

こいに[まも]なにほふらん女郎花人のものいひさがにくきよに

これらの同じやすめ辭なるうちにも。いさゝか意あり。あるが中にてえ
り出たる事におけり。「故郷にしも」所もおほき中に故郷にしもと。故
郷をえり出したるなり。「秋をしも」時もおほき中に秋をしもと。秋
をえり出たる也。外もなすらへて心得べし

千五百番
歌合

草も木もいかに契りて藤の花松にと[まも]とかかりそめけん

是も同じまもにて。下にまを添たるのめづらし
右の外。萬葉にのまもといふやすめ辭猶さまぐにおほし。七の卷古風
の部に出せり

拾

六 とま まも あれ秋 まも 人のわかるればいとたもとぞ露けかりける

これのまも二つ有。上なるのこそに通ふまも。下なるのえり出たるまも
なり

○續古今十五「ながれてと思ひし物をふじ川のいかさまにまもすますな
りけん。此まもの寫し誤り也。古本にしてとあるぞ正しき。又風雅十六
「今まもの嵐にまざるわかれかな音せぬ松の夕暮の山。此まものいたく
わろし。「今のまもとこそいふべけれ

○こそに通ふまも

すべて「をりしもあれ」「時まもあれなどいふこと。「をりこそあれ」「ときこそあれとい
ふに同じ。さる故にこそこの格にれと結べり。萬葉十八の長歌に。「こゝをまもあやに
くすしみ云ふいひつぎにすれとよめる。是もまもどかゝりて。れと結べり。又新古今

六に「をりこそあれながめにかゝる云々。あれ「をりまもあれといふと全く同じ事也。

又蜻蛉日記の詞に「よに道まもこそこのあれと重ねてもいへり。歌にまもこそ重ねい
ふ例之五の卷こそこの部

におほく
出せり 又

後拾 四 をみなべしれたはかる野べにけふ まも あれうしろめとくも思ひやるかな

此三の句の「をりこそあれけふしもといふ意也。かくのごとくいふも又
一つの格也

高内侍 集 君 しまれ新古今十五 まも あれ道 のゆさゝを定むらん過ぬる人とのつわすれつゝ

これも右の後拾遺の歌と同じ格にて。「人こそあれ君しもといふ意也。
此歌新古今に初句「君しまれとあり。これの「まもあれをつめて
いへるにて同じとなり。○風雅十三「今まもあれ人のながめもかゝらじ
をさゆるもをしき雲の一むら。これの例のひがと也。すべて玉葉風雅に
つかゝるみだりあるとぞつねにおほかる

○まもぞ 三の卷ぞの部に出せり

○まもこそ 五の卷こそその部に出せり

らく

古七 さくらばちりかひくもれおららくのこむといふなる道まがふかに
拾十五 塩みてば入ぬるいその草なれや見らくすくなくこふらくのおほき

此外此ことば萬葉に多し。七の巻古風の部に出せり

まく附ま

古十三 いたづらにゆきてりきぬる物ゆゑに見まくはしさにいざなれつゝ

同十七 おもふちまどるせる夜りから錦たまく惜き物にぞありける

同十八 いざこゝにわが世へなんすがらや伏見の里のあれまくもをし

同十七 わたのそらよせくる涙のまばくも見まくのはしき玉づしまかも

拾十六 雪をうすみかさねにつめるからなづなづさまくのはしき君かか

まらべのたらぬ時と。かやうおのもじを添てもいへり。其外萬葉に用
ひまことなるおほし。七の巻古風部に出せり○天王寺百首慈鎮「かけ
まくもかけてぞ頼む云々。これにいみしきひがことなり

又件のまくを略してま共いへり。「見まほし」さかまほしきどのたぐひ也。

拾遺十六の歌に「見まうさどもよめり。

元真集 里よぎでまづもなかなんほとくぎす身のうさ事もつたへまとはし

これと下へとを添へり。いざめづらし。もしのくの誤りにあらざるに
や

けく附けしけき

古十八 世中のうけくにあきぬおく山の木葉にふれるゆきやけなまし

同十九 まめれなごなにぞりよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし

後三 さくら色にきたる衣の深ければ過る月日のをしけくもなし

大和物語 ながけくもたのみけるかなよの中を袖になみだのかゝる身をもて

なほ萬葉に「たひらけく」「こひしけく」「ほしけく」「やすけく」「いたけ
く」「かなしけく」「いらなけく」「ねたけく」「うれしけく」「つらけくなごお
はし

又「寒けし」「露けし」「さむけき」「つゆけき」などのけしけき。右のけくと同じ辭のと

たらけるにて。ことなるとなし。

かし

○かしの切れたる辭の下に添ふことば也もし上にぞのや何なぞの辭あれば。又其格の結び辭にて切たる下にもおく事あり。

後拾十 たもとよりとなれて玉をつまめやこれなんぞれとうつせ見ん かし

後十六 ひぐらしの聲を戀しみけぬべくばみ山をほりにそやもきね かし

後拾十九 いとみがたきにかつらきつらからば恨みがてらにきても見よ かし

同 ながむれば月かたむきぬあこれわが此世のはともかはかりぞ かし

同 ゆかばこそおとすもあらめとささのありとばかりのおとづれよ かし

同 七 きえもあへずとかさき程の露ばかりありやなしやと人のとへ かし

元輔集 松をのみ引てかへらばうめの花おもふころの残るらん かし

後拾十四 おもひには露のいのちぞさえぬべき言の葉にだにかけよ かし 君

同三 みちかみもあらふるころあらじ かし 波もなごしのみそぎしつれば

後拾十六 長しとて明ずやとあらん秋のよもまで かし 槇のとばかりをだに

千十七 たれもみな露の身ぞ かし と思ふにも心とまりし草のいはかな

新 一 ともこ かし 梅さかりなるわが宿をうとさきも人ををりにこそよれ

いせ 戀しくばさても見よ かし ちりやふる神のいさむる道ならなくに

大和 物語 さてもきみわすれけり かし 鶯のなくをりのみや思ひいつべき

○元輔集に「年深き谷の朝霧かつ見てもおほつかなくぞわすられぬかし
の上にぞといへれば。ぬるかしといふべきを。ぬかしといへる。その
結び辭がへり

後拾十七 どへ かし なくよもあらじ露の身をまばしも言の葉にやかゝると

新八 どへ かし ながたしく藤のころも手にあみだのかゝる秋のねざめを

かくのこどく下へなを添てもいへり。又濱松中納言物語の詞に。かし
やとやを添ていへるところも見ゆ

初學のともがら。「見よかし」とへかしなどいへるたぐひのおほきにならひ
て。かしのたゝ願ふ意の辭ぞとのみ心得るひがと也。右に引る歌どもの中

にも願ふ意にあらざるも多きを思ふべし。又文章に殊に此ことばはき中
に。さかし「ずかし」「りかし」「つかし」「るかし」「らんかし」「けんかし」なども
つねにいへるをや。

詞瓊綸六之卷

むすび辭

紐鏡三轉四十三段。又そのはかなるも。すべて結び辭を此卷に因
せり。其中にことなるをなき辭の。こふさていだしす。

と

き

ひも鏡第一段より第五段まで

○おほよそまどまどと相轉る言に三つのかり有り。一には紐鏡第一段。右の行、ま。中の行、
き。左、行の
これ也。二に二第二段。右の行、ま。中の行、まき。左、行の
これなり。三
にの第三段。右の行、ま。中の行、ま。左、行の
まか也
これ也。第四段第五段は第三段に同じ。
さて此三つの中に。上二段第一のま。いとゆる現在のま。下三段第三のま。四第五のま。い
とゆる過去のまなり。後世の名目。おまにのみ現在過去の稱有て。まにに此稱あるとを
まかす。そもく此五段まに。まどまどなり。たいその言の切
るゝど。下へつゝく所どのけぢめにて。上にてにまにまたがひて。かゝるのみにこ
そわれ。意の全く同じくて。まにもまのまどく。現在過去の意のあれば。上二段のま
に。現在のまといふべく。下三段の
まに。過去のまといふまにこそ
かくて上二段の。とも徒のかゝりの時まを結び。

二
ぞのや何のかいりのときと結ぶを。下三段と。うちかへしてとも徒のかいりの時と
と結び。ぞのや何のかいりの時と結ぶ。此事初學のともがらひまごひやすし。紐鏡
と此一の巻の三轉證歌をよく考へ合せてめざまふべし。

ど ぬ ぬ 第六段

○不のいまだ然らぬをかねていふときと結ぶ。みじきかじ さてじと上のてあを
この格すと同じく。とも徒の結びなり。上にぞのや何をおきてり。じとむすぶとな
し

○たじといふべきを。せじといひ。ぬといふべきを。せぬといふ事あり。「かいせじ
「絶せじ」「枯せじ」「つさせじ」「老せぬ」「絶せぬ」「つさせぬ」「消せぬ」などの如し。
といふ時も此格有也。此せと爲の意也。 萬葉に「こえすれ」「死せぬ」などもいへり。又
源氏野分巻に「吹みざる風のけしきに女郎花
まをれしぬべきこいちこそすれ。又玄々集に「本あらの小萩まをれしならんなどある
まも爲にて。ますせとたらく同じとば也。堀川百首萩の歌に「まをれせさする共よ

めり

なり なる なれ 第九段

○ぬなりと。上にぬいといゆるを おきてもいひ。又「聲たてつなりなご」。つをたきても
いへり。皆なるなれも同じ。

○「べらなり。なるなれ。これ萬葉にも一つも見えず。又後にもをさくよまぬ辭な
るにたじ。古今集の此の歌にいとくおほし。
○一つのなり

新二
貫之集

わが宿のもの「なり」ながらさくら花ちるをばえこそとめざりけれ

此なりなきなれぬこちすめれ共。にありをつめてきりといふな
れば。我宿の物にての有ながらといふと也。同じ貫之集に「くる一夜と
ねはかりながらたなばたの年に一よやよるをまららん。此「おほかりなが
らも。ねはくありながらをつめたるにて。同じと也。是にわかきらず。
すべてなりといふ辭。皆にありのついまりたるなり。さる故に萬葉に

ハ在ありとも有ありともかけり

○なになりとどぢめたる格あり。二の卷變格の部に出せり

けり 第十一段

○にけりと。上ににをおきてもいひ。又てけりとてをおきてもいふなり。さて此てけりの時のみ。けを濁りてよむとひがと也。例なし。たゞ清すみてよむべきなり。皆みなけるけりも同じ
○けりなど。下になを添るともあり

○和泉式部物語に「なりけりきといへる詞あり。けりき例なきと也。いかゞをつめてざりといへる也。不有ナラズ來キにサる故に。此時のみり。上にぞのや何の辭なくしてけると結べり。菅家萬葉下卷に「秋のよをわかしむびぬといひけるぞ物思ふ人のためにざりける。是こゝにぞといひて。ざりけると結べる。ひがと也。例もなくとわりもかなとす。ぞのもととなりしを。誤りてぞと書るまゝに。つひに曾そ字にさへ書るるべし。かの書下卷の。菅原大臣のえらび給へる物との見

えず。や、後の人のえらび。見えなれば。かゝるひがとも有なるべし○萬葉にハ此こゝざりけるハ見えず。十一の卷に。戀在と書るを。「こひにざりけりとよめるハ訓の誤也。集中に例なきうへに。けるといふべきを。けりとつけたるもひがと也。

○おしとかるけり

後拾 六 雪ふかき道にぞあるさ山やまざとは我よりさきに人ひとこざり けり

金 四 高瀬ふねさをの音ねぞまられぬるわし間の氷こほりひとへしに けり

新勅十六 殷富門院大輔 ほかにも軒端の梅のにはふの香かほとなりをまめて春はるの來きに けり

千 六 浪間より見えしけしきぞかこりぬる雪ゆきふりに けりまつがうら島

同 一 ねしなべて花のさかりになりに けり山やまのそごどにかゝるまら雲

新 一 ぶりつみし高根のみ雪とけに けり清瀧川の水のまら浪

同 一 かつらきや高間のさくら咲に けりたつたのおくにかゝる白雲

同 二 みよし野のたかねのさくら散に けり嵐あらしもまろき春はるのわけばの

同 三 はとゝぎす深き峯より出に けり外山とほやまのすそに聲こゑの落くる

千三 さなへとる山田のかけひもりにけりひくまめ繩に露ぞとばるゝ
好忠集 岩間にいこほりのくさびうちてけりもりこし水も絶て音せず
伴の歌共のけり。これをもてかれをねしとかり
あるところにねけり。つねのけりとは意かりけり。

ぬ ぬる ぬれ 第十九段

○此ぬいといゆる畢ぬ也。ぬるぬれ 萬葉に去。字を書て。なにぬねとたたく辭なり。そのよし。なんばなでなましなばやなどのな。又にきにけりにしにたりにけんなどのに。又「きえぬ」「たえぬ」「忘れぬ」などの類のねなど。皆此ぬのそたらきたる辭にて。その言のつききにまたがひて。お共に共ぬ共ぬ共なるなり。成といふ言につきて其例を一ついといふなり。なりなん「なりなばなといへばなとなる。」「なりなき」「なりにけりなといへばなとなる。」「なりぬといへばぬとなる。」「なりねといへばねとなる。これをもてなにぬね皆一つ辭なる。さて此なにぬねと。つてと相双ふよし有。次のつづるの部にいへり。とをさとるべし。

○ぬべしぬなりぬめりぬらんぬらしなせもつかけり

○るといふべきに似たる所をぬといふ格

後拾 十八 さゝがにの空にすかける糸よりも心ぼそしやたえぬとおもへば

後拾 三 うつろとんことだにをしき秋萩にをれぬばかりもおける露かな

後拾 三 よもすがらまちつる物をほとぎすまたになかですぎぬなる哉

同 十四 かぎりぞと思ふにつきぬなみだかなおさふる袖もくちぬばかりに

新續古十七 萬 中務 はどちかくきぬなる物をいかなれば春かもあてで年のゆくらん

萬 二十 高圓の尾上の宮とあれぬともたしし君が御名わすれめや

此格のぬを今の人のこれほくの誤りて。皆るといふ也。右の歌共にていとは。たえぬと思へばといふべきをば。たゆると思へばといひ。をれぬばかりもといふべきをば。をるゝばかりもといひ。すぎぬあるかなといふべきをば。すぐるなるかなといひ。くちぬばかりにといふべきをば。くるなるにといひ。きぬなるといふべきをば。くるなるといひ。あれ

ぬともといふべきをば。あるいともといふ。かゝるたぐひみなひがと也。歌にも文にも。古への人の此あやまりある事なし。今の人の此格をしらで皆誤れり。續拾遺十「ときは春るかげのかけのらじ真木の村あまの露霜いくよふるとも。此「ふるとも」の露霜の降る共ならばよろし。もし又いく代へかゝりて。經る共の意ならばひがと也。それあらば「へぬとも」とこそいふべけれ

○堀川後百首(とし鳥のつたふ岩根に涙かけてうきぬしづみぬ身をぞうらむる。

此ぬのつねにのよくいふ辭なれ共。古へ歌にも文にも雅言にの見えす。又此格にいふつも同じ

つる 第二十九段

○此つは上件のぬと相ならびて同意にて。かれのなぬねとはたらき。これはつてどはたらけり。さる故にかのなにぬねと。此つてどつねに相ならぶ也。ぬとつとならび。ぬなりとつなりとならび。ぬれとつれとならび。ぬらんとつらんとならび。ぬらしとつらしとならべり。又ぬべしとつべしとならび。ぬらんとつらんとならび。ぬらしとつらしとならべり。又なはとてばとならび。あんとてんとならび。なましとてましとならべり。又にきとてきとならび。にしとてしとならび。にけりとてけりとならべり。又「きえぬ」「たえぬ」「忘れぬ」などを「きえてよ」「たえてよ」「忘れてよ」といひても同意にて。これねとてならべる也。又てぬとぬと同意にてならへる有。

後三 かくながらちちでよをやはつくし「てぬ」花のときはもありと見るべく
同十一 道しらでやみやはし「なぬ」あふ坂の關のあなた海といふなり

此二つ共にぬは不の意のぬなれば。この論にあづからず。今つてどなと相ならひて同じ意なるをいふなり

ぬ ぬる ぬれ 第十九段也 上に出つ より下第三十二段 づる づる づれ

まで合せて十四段の事

○此十四段のてにをばのとのへは。後世の人つねに誤るとおはければ。今くはしく

わかまへるとす也。そはまづ此下第三十三段より。第三十八段までの六段の六段なり。この十四段とを。同じ格に心得。から誤る也。かの下の六段の言は。たとへば。開行は。さく「ゆくなど」のみひて。さくる「ゆくるなど」のみふとなし。さる故に切る。時もつづく時も同じとにて。上のかゝりは。徒の時も。どのや何の時も。同じむすびなるを。この十四段の言ひ。ぬ共ぬる共。つ共つる共。る共る。共いはるれば。かの六段の格とは異にして。上のてにをは。またがひて。結びもかはるとなり。すべてぬぬる。つづる。すする。るる。くくる。ふふる。むむる。ゆゆる。かくのごとくに下へるを添てもいひ。添すてもいふ詞は。皆此十四段の格。くすつふむるとのみひて。下へるを添ていひはぬ詞は。みな下の六段の格と心得べし。さて此十四段の格と。下六段の格とのけぢめなり。こそこの結びにてよく分る也。その例を「恨む」と「悲しむ」と二つの言にていひ。うらむは此十四段の格なる故に。はも徒の結ひの時「うらむ。どのや何の結ひの時」うらむる。こそこの結びの時「うらむれあり。

かくのごとくこそこの時もむもじり動かすして。三轉共にむといふ。此十四段の格は皆然也。さて「かなしむは下の六段の格なる故に。はも徒の結ひの時も。どのや何の結ひの時も同じく「かなしむにて。こそこの結びの時「かなしめ也。かくのごとくむもじ動きて。こそこの時はめとありて。むといはず。下の六段の詞は皆かくのごとし。これをもて外の詞共をもなすらへるべし。さて此十四段の詞は。結ひの時上にてにをはにまたがひてかはるのみならず。語のなかばに在て下へつづく所にても。その下の受る辭によりてかゝる也。その例を一つ二ついひ。なりぬるを「なりぬるになど」とつづく時は。ぬるといひて。「なりぬを」なりぬになどといはず。然るを「なりぬ」と「なりぬやなど」つづく時は。ぬといひて。「なりぬると」なりぬるやどはいはぬ格也。これをになど受ると。どやなど受ると。その受る辭によりてかはるなり。また可「爲り」すべしといひて。するべしといはず。勿「爲り」すなといひて。するなといはず。此たぐひもみな定まれる格ありて。古人のかのづからあやまるとなかりしを。今の人のとすればあやまると也。さて又自他のかゝりにて。此十四段の格と

下の六段の格と。二様にわたる詞もある也。其例をいひ。解とくのみづからとくるをいふ時は、「とく共」とくる共いひて。此十四段の格なるを。他をとくをいふ時の。た「とくとのみいひて。」とくるとのみいはず。下の六段の格也。碎くだくの。みづからくだくるには、「くだく共」くだくる共いひて。此十四段の格。他をくだくに。「くだくといひて。」くだくるといひはず。下の六段の格なり。折をるをる、關かかくる、切きるきる、破やぶやぶるなどと同じ。此類皆悉すらへ知べし。又立は。みづからたつをいふ時の。只「たつとのみいひて。」たつるとのみいはず。下の六段の格也。他をたつるに。「たつ共」たつるとのみいひて。此十四段の格也。頼は。みづからたのむにのみ。たのむといひて。「たのむ共」たのむるとのみいはず。下の六段の格也。他を「たのむるに」たのむるに「たのむ共」たのむるとのみいひて。此十四段の格也。續つづつづくる、入い入る、沈しづまづむる、添そそふるなどと同じ。此類なほおほしなすらへ知べし。後世の人の。件の自他のけぢめをわきまへずして。或は戀の歌などに。みづから頼むと。人を頼むとを。一つに心得。あるひに露などをよむとて。「おきそふといひての。一もじたらぬ時は。」おきそふるとよむたぐひ。皆ひがことなり。

「たのむるといふの。萬葉に令憑と令。字を添て書て。人をして頼ましむる意なれば。みづから頼むとの異也。又露のみづからおきそふを。」おきそふるとはいひがたし。さる故に古人の。一もじたらぬ時は。「おきそふるとよめり。」おきそふるとよめり。そのるの「そふと同じ意也。」「そふるの他を添そる事にいふ辭也。これらふて自他の意をわきまふべし。すべて此十四段の辭の。右のことくくさく心得あると也。みづりにすべからず。

入 第三十九段

○んんことなる事なし。めめんといふべき所を。上のかりりこそなればめといふ。これれのつね也。又んんやといふべきを。めめやといふとあり。「見んやを」「見めや」「さかんやを」「さかめや」「ゆかんやを」「ゆかめや」これの意を裏うらへかへして。つよくいふ時の辭也。めめやの事。四の卷やの部にいへり。又下をめも受る時も。んんを轉じてめといふ。

古
十 花の木にあらざらめも咲にけりふりにしこのみなる時もがな
万
二 いそのうへにれふるあしびをたをらめと見すべき君が有といとなくに

古一 色も香も同じむかしにさく **らん** 年ふる人ぞあらたまりける
 同二 春ぞとに花のさかりあり **らん** ぞわひ見んといのちなりけり
 件 **らん** のんどめとの格ども皆。らんらんめけんけんめなんなめてんてめなせにもわたりて。
 みな同じことなり。

らん

らん

第四十段

○上にぬ又つをおきてぬらんぬらんめつらんつらんめ共いへり

○かなの意に通ふらん

古一 心ざし深くそめてしをうければさえわへぬ雪の花と見ゆ **らん**
 同二 久かたのひかりのせけき春の日にまづ心なく花のちる **らん**
 同 春のいろのいたりいたらぬ里のあらじさけるさかざる花の見ゆ **らん**
 同 わがやとに咲るふぢなみ立かへり過がてにのみひとの見る **らん**
 同 秋萩にうらびれをればあし引の山下とよみまかのなく **らん**

古十 こゝろから花のまづくにそほぢつうくひすとのみ鳥のなく **らん**
 同 秋風にかきなす琴の聲にさへこかなく人の戀しかる **らん**
 同 十二 えるといへば枕だにせでねし物をちりぢらぬ名の空になつ **らん**
 同 十三 あまのすむ里のえるべにあらなくに恨みんどのみ人のいふ **らん**
 同 十四 ふる里にあらぬ物からわがために人のこゝろのわれてみゆ **らん**
 同 山 **らん** の井の淺きこゝろも思ふぬに影ばかりのみ人の見ゆ **らん**
 同 十五 秋風は身を分てしもふかなくに人のこゝろの空になる **らん**
 右の歌共いづれも上にのどかたりてらんと留りたり
 又のもじなきもありそれと
 古三 はどくぎすわれとのなしにうの花のうき世中になきわたる **らん**
 同八 わかれてふとの色にもあらなくにこゝろにまみてわびしかる **らん**
 同 十八 わが身からうきよの中となげきつゝ人のためさへかなしかる **らん**

此のは下へかゝるのにはあらず

これらの上にのどのかいらす

件の歌でもらんと結びたれ共。皆其事を疑ふにあらす。然るゆゑを疑へるてにをば也。さる故に皆かなといふに通へり。始に引る古今一の「心ざし深く染てし云々の歌にていこ。消あへぬ雪の花と見ゆる其事の疑ひにあらねば。「花と見ゆるかなといふ意なるを。さやうに花と見ゆるゆゑを疑ひて。何とて花と見ゆらんといふ意にて。らんと結べり。然れば「花と見ゆるかな何とて花と見ゆらんといふ意也。次に同二「ひさかたのひかりのどけき云々の歌の「まづ心なく花のちるかな。何とてまづ心なく花のちるらんといふ意なり。次の歌もみな此格に同じ。いづれも△のまるしを附たる所也。何とてといふ言を加へて心得べしさて此ららをらんに通ふといふこと。右の古今一なる「心ざし深くそめてし云々の歌の結句を。顯昭が本に「花と見ゆるかど有。此かのかの意也。又新古今九貫之「見てゞにもあかぬ心を玉ばこの道のおくまで人のゆくらん。此歌も同じ格なるを。六帖には下句を「み

ちのく迄も人のゆくかなとあり。これらにてささるべし

新十五

風二 康資王母

君しまれ道のゆきとをさだむらん 過にし人をおつわすれつゝ
鴈がねの花のをりしもかへるらん たづねてだにも人は惜むに

これらはなからにわれども

同じ格のらんなり。また

古三

むかしへや今もこひしきはとゝきす故郷にしもなきてきつらん

同四

人の見ることやわびしきをみなべし秋霧にのみたちかくらん

同十二

わがこどもものやかなしきはとゝきすときぞ共なくよたゝ鳴らん

同

あふさかのゆふつけ鳥もわがこども物やかなしきねのみ鳴らん

同四

秋の野の草のたもどか花すゝきはにいでまねく袖とみゆらん

同十四

大空は戀しき人のかたみかはもの思ふごとにながめらるらん

これらのらんもみな上なる歌共と同じ格なるうちに。これの上へかへりてそのゆゑをどひかくる格也。さる故に皆上に疑ひのてにをば有て。語

切れたり。古今三「むかしへや云ふの歌にていと」郭公故郷にしも鳴
てきつるかな。何ぞて故郷にしも鳴てきつらんと。そのゆゑを疑ひて。
さて上へかへりて「昔へや今も戀しきとそのゆゑを問かくる也。外の歌
をも、みなかのとし

○かなの意に通ふ格。らんのみならず。けんにもまれにあり。けんの部に出世り

○んとすらん じとすらん

後九 今どのみたのむぢれどもまら雲の絶間いつかあらん 〓とすらん

同十一 いたづらにたびくまぬといふめればあふににをかへん 〓とすらん

同十六 かぎりなくおもふこゝろをつくはねのこのもやいかゝあらん 〓とすらん

拾十八 君が代にいまいくたひかかくしつうれしき事にあはん 〓とすらん

同廿 おもかけに色のみのこるさくら花いくよの春をこひん 〓とすらん

新三 夏つるあふさと秋のまら露といづれかさきにわかかん 〓とすらん

同九 わすれなんよにもこしげのかへる山いつとた人にあえん 〓とすらん

新十八 夢やゆめうつや夢とわかぬかきかなる世にかさめん 〓とすらん

後十九 もみぢ葉をぬさとたむけてちらしつゝ秋と共にやゆかん 〓とすらん

拾十八 うたがとし外にわたせるふみ見れば我やとたえにならん 〓とすらん

後拾八 くれてゆく年と共にぞわかぬる道にや春はあえん 〓とすらん

千十二 こひしなんなみだのこくやわたり川ふかきながれとあらん 〓とすらん

これらの上に何あるひのやなどいふ疑ひの辭あり

拾八 世中をかくいひくのとてくゝいかにやいかにならん 〓とすらん

また 〓とすらん

同廿 〓とすらん

同廿 〓とすらん

同廿 〓とすらん

同廿 〓とすらん

○けん二つある歌

拾六 わかれてふことつたれはとじめけんくるしき物とまらずや有けん

万七 いにしへにありけん人のもとめつゝきぬにすりけん眞野のそり原

○からんの意のけん

古十四 あづさ弓ひき野のつゝら末つひにわが思ふ人にこそこのまげけん

新十七 いせ物語 わが世をばけふか明日かどまつかひの涙のたきといつれたかけん

新勅二 鎌倉右大臣 さくら花ちらばをしけん玉ぼこの道行ぶりにをりてかざらん

此けんこつねのけんとい本より別也。よからんを「よけん」なからんを「なけん」とやうに。からんをけんといいへるなり。此辭なほ萬葉に多し。七の巻古風の部に出せり

なん 第四十二段

○つねのなんことなるとなし

○願ふ意のなん 此格二つ有。ひとつににかさたなとまらよりつゞけり

古十五 わすれ草かれもやするとつれもなき人のこゝろに霜とかかなん

「きかなん」「さかなん」「ふかなん」「なかなん」

「ゆかなんのたぐひ同じ」

後十七 いこのうへにたびねをすればいと寒し昔のころもを我にかさなん

「なさなん」「まさなん」「こさなん」「わたさなん」

「てらさなんのたぐひ同じ」

拾十七 をぐら山みねのもみぢ葉心あらば今一たびのみゆきまたなん

「たいなん」「けたなん」「もたなん」「となたなん」

のたぐひ同じ

古十三 人しれぬわが通ひぢの關守とよひくごどにうちもねなん

「見えなん」「きえなん」「くれなん」「あせなんのたぐひ也又「なりなん」「ゆきなん」「たちなんのたぐひ猶ほし

古十二 まぬるいのちいさもやするとこゝろみに玉のをばかりあそんといとなん

「あゝあゝ」どぞなん「思ふなん」にはあゝあゝ
のたぐひねあじ

新葉

春日山をのへの雪もさえにけりふもとの野べの若葉つまきん

「あまなん」「くまなん」「すまなん」「うづまなん
のたぐひねあじ

古
十二

たのめつゝあゝで年ふるいつをりにこりぬこゝろを人たまらなん

「ちらあゝ」「あらん」「ならなん」「をらん
ふらんなんのたぐひねあじ

右の格とすべてみな願ふ意になるなり。とちめにかぎらず。いづれの句にあ
りてもねあじとなり。

ふたつにのえけしてへめれゑよりつゞけり

古
十八 人まれずねもふこゝろを春がすみたち出て君がめにも見えなん

同
十一 春たてばさゆるこほりの残りなく君がこゝろを我にどけなん

後
十四 まら雲のゆくべき山もさだまらず思ふかたにも風りよせなん

同
十九 此たびも我をわすれぬものならばうち見ん度に思ひいてなん

同
二十 年のかすつまんとすなる重荷おのいとこづけをこりもそへなん

後拾
三 夏の夜の月のはどあくいりぬともやどれる水に影とどめなん

後
十四 さをしかのつまなき戀を高砂の尾上のこまつきいもいれなん

夫木
まれにきて戀もつきぬにいそぎゆく人をおさへの關もすゑなん

右の格も何れの句に在てもみな願ふ意也。但しえけしてへめれゑよりつゞけ
り。つねのなんと同じ格あれば。 「君をわきてあたし心をわがもたば末の松

春たてばとまらずさゆるゆきかくれなんなどの類 山波もこえなん「人ぞゝろうさこそまされ

右の歌共と同じ格なれども。つねのなんなり 其歌の意によりて心得わ
くべし

右二つの格の中に。上のかさたえまらの方。皆くすつふひると結ぶ言にて。
ひも鏡第卅三段より第卅八段までの六段の格の言也。次のえけしてへめれゑ

の方の。皆第十九段より第卅二段までの十四段の言也。かくの如く定まれる中に。なよりついで。な〜んといふ上の言のみ。かの十四段の言六段の言。二つ共に通ひしむ格也。ねな〜んのねと。ぬ共ぬるともいひ。見えなんの見えり。見ゆ共一見ゆる共いひて。これらかの十四段の格の言也。又「ちりぢりなんの」なり。なるとのみいひて。なる〜んといはず。「ゆきななんの」ゆきり。「ゆくとのみいひて。ゆくるといはず。これらかの六段の格の言なり

また

源氏
すま

山がつのいほりにたけるまば〜もこと〜ひこ「なん」こふるさと人

これの右の二つの格にこづれたり。来り〜共くる共結ぶ詞にて。かの十四段の格なれば。けなんといふべき格をれども。さ〜いひがたき故に「こなん」といひて。れのづから願ふ意に聞えたり

後
十二

すみぞめのくらまの山にいる人はたどる〜もかへりさな「なん」これもな〜んの上と。かの十四段の格の時也。えけせてへめれるよりの〜く定まりなれば。け〜んといふべき格なれ共。さ〜いひがたき

万十七
長歌

故に「きな〜ん」といひて。れのづからかなへると。右の源氏物語の歌と同じ。すべて見來なごのとたらしり。中古以來の語にて。定まりの如くにいひがたき事有故にかくの如し。来りもとさくけととたらく言也

ほと〜さすきなかん月おいつしかも早くなり「なん」云々
これ「ならなんといふべき格なるを」なり。あんどいへり但し上に「いつしかもとあれば。いつかならんと思ひて待つ迄としても見るべし。その時いつねのなんなり

すべて願ふ意のなんの上のか〜り。と〜徒のみ也。ぞのや何なごの辭をおく例なし。續後拾遺十七「と」にかくにうき身となれぬうきよといひて後ぞおもひえらなん。此歌上にぞといひて。「ちりぢりなんの格のなんにてとちめたるいひがと也。たとひ上にぞいなくとも。本より「ちりぢりなんといふべき歌に」あらず。もしいま世をいととぬさきに。末をたしはかりたる意ならば。ちりぢりなんといふべし。もしわら〜りを寫し誤れるにや。然れ共一首の趣。すでに世をいとひとなれて後に。思ひまれる意のごとく聞ゆれば。かならず「ちりぢり」と結ぶべき歌なるをや

○なん二つある歌

古二 いざくらわれもちりなんひとさかりありなば人にうきめ見えなん

これ二つともにつねのなん也
また

後五 けふよりは天の川原をかせななんそこひともなくたゞわたりなん

新 一 やかすとも草はもえなん春日野をたゞ春の日にまかせたらなん

右後撰なる。上の願ひ。下のつねのなん也。新古今なる。上とつねの格。下の願ひのなんなり

○ぞの意に通ふなん

古十 たもとよりとなれて玉をつまめやこれなんそれどうつせ見んかし

後拾 十一 かくなんどあまのいさり火ほのめかせいそべの涙のをりもよからば

六帖 つれぐになにかなみだのなかるらん人なんわれを思ふともなく

信明集 かくなんと人えるらめやゆく道もこゝろとめておもほゆるかな

好忠集
鱈蛤日記
長歌

わがせこが袖まろたへの花のいろをこれなん梅とけふぞまりぬる
春の末花なんちるとさわぎしを云々

此なんと。歌にいとまれにして。右の外のをさく見わたらず。文章にいとおほし。古今の序に「赤人之人まろが下にたむとかたくなん有ける。などあるなん也。猶七の巻文章の部に委くいふべし。さて此なんを上代にのなんといへり。

万十二 いつこなんこひずあるとのあらね共うたて此ころ戀のまげきも

ましこれより下かなまての。おたらかぬ辭なる故に。紐鏡三轉の外なり。

○おほよそましんを延たる如く聞えて。大かたんといふと同じ意あり。然れども。んといふべき所を。皆ましといひて。かなのぬとおほし。そのけぢめ。古への歌又文をつらく味ひ見てわきまふべし。然るを後世の歌には。らんなんなどいふべき所をも。みだりにましといへるひがとおほし又まじを濁りて。まじと唱るもひがと

也。必清^{すむ}べき辭也。これを濁るから。初學の輩の。不の意のまじと一つに心得て。ま
ぎらりすことおはさぞかし。かの不の意のまじの別に下に出せり。

○なましてましと。上になてをおきてもへり。

○古き歌の例を考るに。ましと結べるの。おほくの上にはといふ辭あり
外に別にありて。
此はのともぞ
のや何などの

三の巻に出せり

古
二 花のごよのつねならば過してしむかしりまたもかへりきなまし

同 吹風おあつらへつくる物ならば此一もとはよきよといとまし

同 一 うめがしを袖ふうつしてとめてば濁れば也春のすぐ共かたみならまし

同 よの中にたえて櫻のなかりせば春のころこのどけからまし

古歌おほくの右のごとく上にはもじあり心をつくべし

又下よりかへりて。上にてましと結べるの。必下にはもじ有

後拾 一 思ひおくとなから「ま」庭ざくら散ての後の船出なりせば

新 十六 わすれじよわするなとだにいひて「まし」雲の月のころありせば

又上にはもじのなきの

後 廿 よそにをる袖だふひちし藤衣なみだに花も見えずぞあらまし

後拾 十六 としをへて見る人もなきふる里にかとらぬ松ぞあるじならまし

かやうに上にはもじなきの。いとくまれ也。但しや何なとくかへりた
るにの。そのなきも多し。又ましをまし物をなど留れるにも。上には
のなきもおほし

○ましを 此をの物をの まし物をましやましやとなといへるもおほし。又
意のをなり

○ましかばと上にいへば。以又ましといひて結ぶ格也。ませばも同じ。又

○下の詞へつとくまし

源氏 夕霧 かすならば身にまられ「まし」世のうさを人のためにもぬらす袖かな
此を「なる物を」といふ意也

千十二 なれてのちつらからまし〇ふくらぶればなき名のこの數ならぬかな
〇まし〇二つある歌

古一 けふこそば明日の雪こそふりな〇まし〇きえずのあり共花と見〇まし〇や
〇一つのまし〇

古一 見る人もなき山さとのさくら花外のちりなん後ぞさか〇まし〇

千九 さくらばな見るにもかなし中〇にことしの春のさかすぞあ〇ら〇まし〇

新八 花見んとうゑけん人もなき宿のさくら〇のここの春ぞさか〇まし〇

大和 ざる澤の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひな〇まし〇

後三 風をだにまちてぞ花のちり〇あ〇まし〇心づからにうつるふがうさ

此まし〇のみな上にぞもじをわけり。つねのまし〇ながら。いさ〇か意か〇りて。一つの格也。その意〇。「かやうにこそ有べきとなれといふ意にて。さやうにあらせまはしくねがふ〇ころある也。始めの歌にてい〇こ〇外〇のちりなん後にこそさくべき事なれといふ意にて。外の花のちりたらん

後にさかせまはしく思ふ意なり。いづれも皆これになをらへて心得べし。
又

古十八 おもひけん人をぞどもに思〇こ〇まし〇まさしやむくいなかりけり〇と

此歌のつねのまし〇の意にても聞え。又この格としても聞ゆるうちに。こ〇の格にちかきなり。

〇まし〇不〇のこれのまし〇と〇の本より別なる辭なれ共。ついでふこ〇又出せり。

詞十 此世に〇又も見る〇まし〇うめの花ちり〇く〇ならんとぞかなしき
匡房卿 河をしの柴つみぐるまいか〇する氷のくさびふゆ〇たへ〇まし〇

此辭のいやしく聞よからぬもの也。ざる故に古への歌文に〇。これらの外〇のをさ〇く見えず〇見るまし〇の「見じといひ〇たへまし〇たへじといふぞ。雅言に〇有ける。但し語を下へつ〇くくる時に「見るまし〇き云々。」「たふまじき云々などいふ〇つねの事にて。日本記の歌にすら「よるまじき川のくま〇くなど見え。萬葉又後の歌文も有。

らし
附 けらし

○らしのらんのとたらきたる辭にて。疑ひの重きと輕きとのけぢめと聞ゆめれ也。古き歌共を考るに。又さる意のみにもあらぬがごとし。但しや何などの結びおのらんのみおほくして。らしのいとくまれ也。後撰五「こひくで逢んと思ふ夕暮のたなばたつめもかくやあるらし。是も一本にのかくぞあるらしと有。此外一の卷三轉證歌の中に一つ二つ出せるが如し。さて又らんの。下へ語のつゞく所にもつねにおけり。「萩が花ちるらん小野の云ふなどの如し。然るにらしの下へつゞく例をさく見えず。たゞ萬葉十八長歌に「ありがよひめし給ふらしものゝふの云ふ。又共に「大君のつぎてめすらし高圓の野べ見るごとにねのみしなかゆ。これら下へつゞけり

○ぬらしつらしと。上にぬつをおきてもいへり。又らしもど。下にもをそへてもいへり。

○あらしならしからし「深からし「高からし「寒からし「これらあらんらんからんのんをこたらかして。しといへるをれば。つねのらしと同じきが如くなれ共。つねのらしと。上の言と離れて一つの辭なるを。

上の言となれたりとの。たとへば「ゆくらし「ちるらしなどいふ。上の「ゆく「ちるの言

とらしとの別に離れたるをいふなり 此らしの。らしの上の言に附たれば。「あらしの「あらしの「あり共言に附たり。つねのつらしのらしの。とたらくとなし。又「ならしの「あらしの「なり共「なる共とたらさ。からしの「からも。「寒かる共「寒かりともとたらくと事。「あらしの例に同じ。さて「ならしの「にあらしのつゞまりたる辭。「からしの「くあらしのつゞまりたるにて「寒からしの「寒くあらし也。「深からしの深くあらし也。さるゆゑに「ならしも「からしも。あらしと異也。されどてにをこのとへの格と。みなつねしと同じ例なるなり。

のらしに同じ

○けらし これのけりけるけれのとたらきたるにて。らるるれのとたらき右のあらしなどの格と同じけれ共。下のしこのこのみの。んととたらくとなし。けらんと然れがこれの本よりらしとの別なる辭なり。

一説にけらしのけるらしのつゞまりたる辭也といへれども。萬葉に「けらすやといへることもあまたあるを。けるらずやといひがたし。けるらずといひてり。らもむあまりて附ところなし。まかれは「けらしも。かの「けらすやのたぐひにて。らしけりけるけれ

けらとこたら されどてにをこのとへの格とこれもらしにおなじ。

きたる物也 ○にけらしと。上ににをなきてもいふ。又けらしもけらしなど。下にもなを添てもよめり。上にぞといひて。けらしなと結べる歌。

新勅十四 延喜御歌 まぐれつゝ色まさりゆく草よりも人のこゝろぞかれに けらしな

能宣集 夜を寒みまがきの草を見わたせば今朝ぞ初霜置に けらしな

また

萬九 つかのうへに木枝なびけりさくがこどもぬをどこにしよるべ けらしも。

此「よるべ」つねにいふよるべにあらす。べと可の意。けらしのけりその「べきのさのたたらきたるにて。」べけれのけと同じ。然れば一句の意「よるべかりけらし」とんが如し。

つゝ

〇てに通ふつゝ

古四 物ごとに秋ぞかなしきもみぢ づゝうつろひゆかくをかぎりと思へば

同 をみなへしうしと見 づゝぞ行過るをどこ山にしたてりとおもへば

同五 花見 づゝ人まつときと白妙の袖かどのみぞあやまたれける

同七 春日野にわかなつみ づゝ萬代をいとふ心と神ぞまゐらん

同十一 あふことは雲はるかになる神の音にき づゝ戀渡るかな

右のたぐひのつゝ。てといひてもよろし。但しての廣く。つゝを狭し。

さる故に。つゝといふべき所を。てといはるれども。てといふべき所を。つゝといひてのかなぬとねはし。抑ての廣く。つゝの狭きゆゑと。一つの例をもていと。

「音に聞て戀わたるといふと。先ッ音に聞て。後に戀渡るにもいひ。又音にきくと戀わたると。同時に相交るにもいふ也。然るを「音にき づゝ戀わたるとい。音にきくと戀渡ると。同時に相交るにのみいふ辭にて。先ッ音に聞て後に戀渡るにのみいひかたし。すべてつゝの此意にて。これをしつゝ。かれをも相まじへてするをいふ。此故に。上にいふ事と。下にいふ事と。たがひに同時に相まじへる時に。その中間にねく辭也。

然るに後世の人と。此けぢめをわきまへずして。てといとんに。もじのたらぬときり
みだりに通つしてつゝといふとひがと也。てとつゝにかよへ共。つゝにに通りしが
たき所ありとあるべし。

古四 山里は秋こそことにわびしけれ 鹿のなくねにめをさまし 〔つゝ〕

同 筑波根のこのもどとに立ぞよる 春のみやまの陰をこひ 〔つゝ〕

後三 いつのまにちりてぬらん 〔さくら花れもかげにのみ色をみせ 〔つゝ〕

同 天の川戀しきせにぞわたりぬる 〔たきつ涙に袖をぬれ 〔つゝ〕

拾十五 君をなほうらみつるかな 〔あまのかるもにすむしの名を忘れ 〔つゝ〕

右のたぐひのつゝ。留りにあれども。上へかへる格なる故に。中にあるも同じとに

て。上の件のつゝといとつなり。

古十一 音羽山音にき 〔つゝ〕あふ坂の關のこなたに年をふるかな

同 十二 たのめ 〔つゝ〕あをで年ふるいつはりにこりぬ心を人はまらなん

同 十五 月夜には來ぬ人またるかきくも雨もふらなんわび 〔つゝ〕もねん

古 人しれずたえなましかばわび 〔つゝ〕もなき名ぞとだにいとまし物を

後四 うらめしき君が垣根の卯花はうしと見 〔つゝ〕も猶頼む哉

これらのたぐひのつゝ。ながらといふに通ひて聞ゆ。されど上のつゝと別ならに
あらず。同じつゝの中に。おのづかふかく聞ゆるがあるなり。さて此ながらに通ひて
聞ゆるつゝ。下にもを添たるがたはさ也。すべてつゝ。てといひてもよろしき故
につゝもつゝもといひてもよろし。さて

そのつゝ。即ながらもといふに通へり。

○下にこゝろをふくめていひすつるつゝ

古 春がすみたてるやいづこみよしのよし野の山に雪のふり 〔つゝ〕

同 雪のふりつゝ 春とも見えぬ物をといふ意をふくめたり

同 梅枝おきあるうぐひす春かけてなけ共いまだ雪のふり 〔つゝ〕

同 雪のふりつゝ 春ともなきとよといふ意をふくめり

同 君がため春の野に出てわかなつむ我衣手小雪とふり 〔つゝ〕

雪のふりつゝ「いと寒さにつめる若菜ぞこいふ心をふくめたり

同 山ざくらわが見にくればとる霞みねにもをにも立かくしつゝ

立かくしつゝ「見せぬ事よとふくめり

同 四 やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられかたさかにほひつゝ

香にははひつゝ「いとなつかしきいとふくめてさてそれのやどりせし人の形見かといふ也

同 五 風ふけばおつるもみぢ葉水さよみちらぬ影さへ庭に見えつゝ

庭に見えつゝ「えもいとすおもしろさけしきなる哉とふくめり

同 六 あらたまの年のをりになるごとに雪もわが身もふりまさりつゝ

ふりまさりつゝ「老もてゆく事よとふくめり

同 十一 こひまねとするわざならしうば玉のよるのすがらに夢に見えつゝ

夢に見えつゝ「うつゝに逢事なくてたへがたさまで戀しきこのひまねとするわざならし也

古 十一 夕されといとひがたさわが袖に秋の露さへおきそとりつゝ

露さへおきそとりつゝ「いとわぬるよとよ

同 十三 いたづらにゆきての來ぬる物ゆるるに見まくほしさにいざなりれつゝ

見まくほしさにいざなりれつゝ「猶ゆく事よ

同 明けぬとてかへる道にのこきたれて雨もなみだもふりそほぢつゝ

ふりそほぢつゝ「いとわびしくかなしき別れなるかあ

同 花すゝきはに出て戀の名をしみ下ゆふひものむすばれつゝ

むすばれつゝ「下にのみこふるとのくるしさよ

同 十五 こめやどの思ふものからひぐらしの鳴ゆふくれをたちまたれつゝ

立ちまたれつゝ「またでのえあらず戀しき事よとふくめたり

後 六 秋の田のかりはのいほのとまをあらみ我衣での露おぬれつゝ

露にぬれつゝ「秋の夜をもちわかす事のわびしさよといふ意をふくめり

拾 万八 春の野にあさるきすの妻戀におのがありかあたり方を人にまれつゝ

人にまれつゝ「とらるゝ事のあこれさよとふくめたり

右の歌共のごとくつゝといひすてゝ。上へかへらぬと。皆詞の外に意をふくめり。そのふくめたる意の。一首の趣をよく味ふれば、たのづから心にうかびてまらるゝものなり初學のともがら。此格をみだりによむべからず。かならずひがとあるとそかし

新六 田子のうらにうち出て見れば白妙のふじの高根に雪のふりつゝ

此歌の萬葉三に出て。初句「たごの浦ゆ。三の句「ましろにぞ。終の句「雪のふりけるとあるを。朗詠新古今に今のごとくかへて入れたれど。白妙のといひて「ふりつゝと留りたるのいか也。もしつゝと留らば、「まろたへにどこそ有べきを。にもじさしあふ故に。歌さまを優あらしめん。とて。のどの直されたるなれと。ことわりさだかならず。後世これに説かれども。いとをさなきとなればよるにたらず。

かあ

○おほよとかなり。かといふ辭になを添たる物也。なり「けりな「けらしな「がもななどのたぐひのななり

此故にかなといふべき所を。かとのみいひたるもおほし。四の巻かの部に出せるが如し。又萬葉にかなといへる辭なし。後になといふ意なるをも。皆かもといへり。哉字を書る所二つ三つわれ共それかもと訓べき也。日本紀の此字をかねと訓る事もあり。さてかなの上のかりとも徒の也。證

歌一の巻に出せるがごとし。ぞや何こそのかかりに。其中にも。もとかいれるが殊におほき也。てのかなとまとまらず

古一 春やとき花やおそきときわかんうぐひすだにも鳴ずも有かな

同 ちちのたづきもえらぬ山中におほつかなくもよぶ鳥かな

同 八 むすぶ手のまづくにゝる山の井のあかでも人にわかぬるかな

同 十一 ほどいぎすなくや五月のあやめ草あやめもえらぬ戀もするかな

次に徒なるもねはし

古二 まつ人もこぬものゆゑにうぐひすの鳴つる枝をりてけるかな

同 十一 おとと山音にさつゝあふ坂の關のこきたに年をふるかな

古 十一 つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまでなげきつる かな

同 十二 秋の野にみだれて咲る花の色の千種に物をねもふころ かき

次にのどかゝれるもおほし

古 四 まつ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしき かな

同 十四 かれとでん後をばまらで夏草のふかくも人のおもほゆる かな

後 四 まるたへにははふ垣根の卵花のうくもきてとふ人のなき かな

同 十四 さしてこそ思ひし物をみかさやまかひなく雨のもりにける かな

次にとどかゝれるのいとまれにあり

拾 二十 うきながらさえぬ物と身なりけりうらやましきと水の沫 かな

詞 二 どしをへてかけしあふひとかひらねどけふのかざしとめづらしき かな

○もどく意のかな

古 二 まつ人もぬものゆゑに鶯のなきつるえだををりてける かな

古 十三 まくらより又まゐる人もなきこひを涙せきあへずもらしつる かな

同 十六 夢とこそいふべかりけれよの中にうつゝある物とおもひける かな

同 十九 君が代にあふ坂山のいとし水こがくれたりと思ひける かな

これらみづからのうへをもどけり。六帖に「なに思ひけん共あるをも
て。もどける意なるをささるべし。いづれの歌もみなおまじ

同 二 まるしなきねをもなく かな うぐひすの今年のみちる花ならなくに

同 十五 わひ見ぬもうきも我身のから衣おもひまらすもどくるひも かな

これら鶯のなくをもどき。紐のとくるをもどけり。

○ぬかな

古 十九 出てゆかむ人をとゞめんよしなきにとなりの方にとなもひぬ かな

後 十 わが門の一むらすゝさかりかとおん君がたなれのこまもこぬ かな

六帖 我をこそとふにうからめ春霞花につけても立よらぬ かな

これらまかくあれかしとねがふとの。さもえあらぬを。深くなげきて

いふかななり。此格萬葉におはし。

がな 濁附が がも

○おほよそもがなとつゞく時と。すべてかを濁りて。願ふ意の辞也。又まがなにしが
なにも。かを濁りて願ふ意なるあり。てしがな皆濁りて願ふ意也。

○もがな

古七 かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよし **もがな**

同十 花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみある時 **もがな**

後十一 名にしおと。相坂山のさねかづら人にまられでくるよし **もがな**

同十八 ちりにたつ我名きよめんも敷の人のこゝろをまくらと **もがな**

もがなとつゞくときり。みなかを濁りて願ふ意也

かを清てつねのかなあるのなし

○しがな

金三 秋ならでつまよぶ鹿をさし **しがな**をりから聲の身にたまむかと

みれの願ふ意也。又しかなにいつねのかなもおはし。後拾遺十二「やす
らとでねなまし物をさよふけてかたぶくまでの月を見しかな。新古今十
四「はの見えし月を戀しどかへるさの雲路の浪ふぬれてこしかな。新勅
撰十一敦忠卿「雲るにて雲るに見ゆるかさゝぎの橋を渡ると夢に見しか
な。これら願ふ意にあらず。つねのかな也。

○にしがな

赤染衛門集 みやこ出てふけてぬかに成にけりとうかの國にいたり **にしがな**

夫木 後成卿 いそがくれまかぢしげぬきこふぬの早くうき世をいなれ **にしがな**

これら願ふ意也。又文章に願ふ意のにしがな多し。つねのかななるの
新古今十三「秋の夜の有明の月のいるまでやすらひかねてかへりにし
かな新勅撰十八國信卿「朝夕になげきをすまにやくしほのからくけふ
うにおくれにしかな源氏幻卷「なくくもかへりにしかなかりのよひい
づくもつひのどこよならぬに。齋宮女御集「すいか山音にきくけん君よ
りも心のやみにまどひにしかな。これら願ふ意にあらず。

○てしがな

古十九 みゝなしの山の口きしえ **てしがき** 思ひのいろの下ぞめにせん

後十四 おもひつゝまだいひそめぬわがこひをねなじ心にまらせ **てしがな**

同 わかずしてまぐらのうへにわかれにし夢路を又も尋ね **てしがな**

拾八 ひさかたの月のかつら花をるばかり家の風をもふかせ **てしがな**

同十四 我やうき人やつらきとちのやぶる神てふ神にとひ見 **てしがな**

大かたてしがなり皆ねがふ意也。つねのかなに之例あり。然るに續後撰九「ひかりをば玉くしの葉おやのらげて神の國ともさだめてしかな。是つねのかな也。いとめつらし。」

○もがこれにつねのかなを。かどのみもいふ如く。願ふ意のがなを。かどのみいへる也。もかなに同じ

古十一 こゝろがへするものに **もが** かた戀こくるしき物と人にまらせん

後六 万八 わかや冬の尾花がうへのまら露をけたすて玉にぬく物に **もが**

此外もがの萬葉にいとおほし

○まが まがなにおなじ

古二十 かひがねをさやにも見 **しが** けいれなくよこほりふせるさやの中山

万十一 せとう歌 まそ鏡見 **が** と思ふ妹にあそんかも玉のをのたえたる戀のまげさ此ぞる

○おしが おしがなに同じ

後十三 いせの海にあそぶあまともなり **こしが** 涙かき分てみるめかづかん

好思集 こゝろうし深き山にもいり **こしが** のどかにをりてうさよすぐさん

齋宮 女御集 いかでなは春日かすみになり **にしが** おもこぬ山やかゝるわざせじ

○てしが てしがなに同じ

古十四 あな戀し今も見 **てしが** 山がつかきほにさけるやまとなてして

同二 おもふとち春の山べにうちむれてそこ共いとぬ旅寐し **てしが**

後十二 いとかくてやみぬるよりはいなづまのひかりのまにも君を見 **てしが**

此外萬葉にも有

○もがも

古 廿

かひがねをねこし山こし吹風を人に「かひがも」やこつてやらん

万 一

かひらのゆづ岩むらに草むさずつねわ「もが」などこをどめにて

此外萬葉におほし。又てしがももかの集にこれかれ有

ねはよそ願ふ意の「かひがも」かな「かひがも」かな「かひがも」といふにか

ぎれることにて。其外例なし。

新勅撰十九「いせの海おきつ白浪花に「かひがも」もつゝみて妹が家づとにせんこ
れと例なきひがと也。此歌の萬葉三に在て「花にも「かひがも」がとあるを。改めて
入れられたる也。六帖にも。萬葉の歌をかくあらためて入たる誤り所
にあり。又源氏橋姫卷の詞に「かの君たちを「かひがも」がなどある。もををに寫
し誤れるなるべし

○がなどかなとある歌

後拾 十二

君がためをしからざりしいのちさへ長くも「かな」と思ひける「かな」

詞瓊綸七之卷

古風

○萬葉集によりて。古風の歌をよむともがら。假字づかひをばくとしてくさだすめれど。
てにをはのどのたえてさだせず。さる故に歌もさらぬ詞も。と一のとざるこのみぞお
はかる。さるのかのかなづかひと。定まれるのりなければ。みづからのちからもて。
こころえわさまふることなくして。たゞふるさふみ共にかけるあまによるよりほか
のわざしなければ。いとたやすきを。てにをはのみな定まると、ひの有て。そを
よくさるとる時と。こともなければ。そのさだまりをわさまへさるとたやすからず。
さる故にすべて後の世に。大かた言の葉の道心得たりと。みづから思ひゆるせる人
も。猶たどくしく。ともすればあやまるとおほきぞかし。歌にまれ詞にまれ。此て
にをこのとゝのとざる。たどへばつたなき手して縫たらん衣のごとし。その言葉と
いかにめでたき綾錦なり共。ぬへるさまのあしからん。見ぐるしからじやと。然る

を古風をまねぶどもがら。これをいとのへむ物とも思へらぬ。いにしへぶりにと。
てにそこの定まりのなきと、や思ふらむ。そもく此とのひり。さらに後の世に定
めたる物にあらす。神代の始より人の言の葉にまたがひて。おのづから定まれる物
にし有ければ。ことさらに心せざれども。おのづからよくとへのへりければ。いにし
へのことにこれをさだし學ぶともなかりしを。後の世になりて。やうくことばいや
しく。みやひごとの物うとくなるまゝに。たがふふくもあるによりて。とかくさだす
ることもしまりしを。まことに今の。ことさらにたづねもとめざれば。あきらめえが
たくなん成にける。然るを古、ててにをはといふ名なく。さだもなかりし事也とて。
すつべきことわりあらむや。かのかなづかひも古、おのづからわかれたる言葉の
聲につきて。定め書つる物にて。心せねどもおのづからたがふまのなかりし故に。殊
にそのさだのなかりしを。後にみだれたるによりて。そのさだの出来しにあらすや。
いで上つ代よりてにをその定まりの。正しかりけるを。くそしくいとむ。まづ古事
記と日本紀とのれる歌。長さ短き合せて百八十餘首ある。皆いと神さびて。今の世

に耳遠き調共のほはかれども。てにをこれにいたりてと。古今集よりこなたのとのへ
と。ももら同じくて。ことなることあし。其中に。た仁徳。御卷なる皇后の御歌に
「ころもこそ二重もよき。天智。御卷の童謡ふ「あゆこそい島べもえき」えきとある
此二つと。こそどかありて。さと結びたる。後の格にたがへり。但しこれも萬葉の
例おほければ下に出上つ代の一つの格と見ゆ。又推古。御卷聖徳太子の御歌に「おや
なしおなれなりけめやとあると。汝親おれおしにありたりやといふ意なれば。後世の格な
らば「なりけんやと有べきを」けめやとあるの異也。但し此格も萬葉に殊に多くあ
れば。下に出古の格なるべし。後の歌にも例えある也。拾遺集「みやこ人ねてまつ
らめや時鳥今ぞ山べを鳴て
いづなる。源氏をよめの卷「日影にもまゐるか
りけめやをよめこが天の羽袖にかけし心
る格のごとくあて。いさゝかもことなるとなけれは上つ代よりしておのづから定まり
あると明らかし。古風をよまん人も。いかでかてにをはをたさすての有べき。その
どもがらもよより是をさだする事なく。心にかける故に。あけくれ古の歌をば見

れ共。此と一のひあるををえらざる也。次に萬葉集も。二十卷四千五百餘首の中に之。さまざまのめづらしき詞。又いひざまつりけざまなをり。いたく異なるとのみおはかれど。てにをはのとのひにいたりてり。もたら中昔の格と同じくてたがへる歌の百おひとつも見えず。然れば此てにをこのとのへのみの。たゞ古今集よりこなたのを守りて。つゆたがふとなければ。今此部に。古へのとのへとてり別にあげず。古風をよまむ輩も。同じく紐鏡三轉の證歌をよく考へて。あきらめざるべきなり。

○萬葉集の中てにをはたがへる歌

十四ノ 廿七 たくぶすまえら山風のねなへどもころがおそぎのあろこそえし志も

「えしものよしも也」さて上にこそとかりて。きと結ぶ▲の。集中に多きを。これのしと結べるのたがへり。もしの志の吉の誤歟。とちめのもり。添たるのみの辭なればかゝりらす

十九ノ 四十四 天地とあひさかえんと大宮をさかへまつればたふとくうれししき

これの上にてのや何などのにてをりなく

して。しきと結べる。たがへり

五ノ 廿三 たらし姫神のみとのなつらすとみたしせりしいしをたれ見吉

これの上にてたれといへれば。「見しと結ぶべきを」見さといへるのたがへり。もしとこれも。志を吉誤れる歟。草書の内とよく似たり

十四ノ 廿九 妹をこそあひ見にこしかまよ引の横山べろのまくなすおもへる

これの上にてのや何などのにてをとなければ。ねもへりと結ぶべき格也。然れ共へりといひてりよろしからず。へるといふべき歌也。後世にも此例あり。二の卷變格の部に見ゆ

十九ノ 十六 ちら玉のみがはし君を見ずひさにひなにしをればいける流ともなし

これのかならず「いけりともなしといふ格也。もしの流、字の理などのあやまりにあらざるにや

十ノ 四十三 秋田かるかりほをつくりわがをればころもで寒く露おきにける

此結句の例を他の歌に考るに。いづれも「露ぞおきにけるとあれば。これ後にもぞもじを脱せるなるべし。ぞといえでけるとの結びがたし

二十ノ
卅五

からころもすすそにさうつきなくこらをおきてぞきぬやおもなしにして
これの上にてぞい入れば。きぬるこそいふべきを。きぬやさう入るの
さうのりず。やもじりあるもなきも。てにをこの格にあづからず。ぬる
さういふべきを。ぬさのみいへるがたがへる也

二十ノ
廿四

あしがきのくまに立てわぎもこが袖もまはくになさしぞもとゆ
此結句の泣しぞ思はゆといふと也。上にぞとあれば。ゆると
結ぶべきを。ゆと結びたるなり。るもじたらでととのとす

四ノ
廿九

いきてあれば見まくもまらず何しかもまなんよ妹といめに見えつる
これのぞやの何なきなくして。つると結べる。かなとす。上の「何しか
も」。此結びへのかくらねば也。但し初句を「いきてあらばと訓ふとさ
り。二の句の意かりりて。何しかの言。つる迄かれば難なし

九ノ
八

風莫のたまのまら波いたづらにこによりくる見る人なしに
これも上にぞのや何なければ。よりくといふべきを。くるといへるの
たがへり。一云於斯依來藻とある。これよくさうのへり。すべて萬葉の

十四ノ
六

むざしねのをみね見かくしわすれゆく君が名かけてあをねしなくる
この格を見るに。一もじたらぬとこ
ろの。もを添てまらべをたす例なり
結句これと同じき。同卷廿一のひらに今一首あり。あをねしなくるとり。
我をねに泣するといふとにて。その「あかすのかすをつめて。くど
なれる也。然るに此歌の。上にぞのや何りてよをとなければ。あかすと
こそいふべけれ。なかつるといひていたがへり。然ればとちめのもじ
よろしからず。但し變格の例也。さて此歌の「さかみねのをみね見そぐ
しわすれくる妹が名よびてわをねしなくなどある歌の次也。或本歌とて
のせたり。なくなの下のな。添たる辭をれば。これのよろし。又同卷廿
のひらに。あをねしなくよ。又廿の卷四十三のひらに「あをねしなくも。
なともあり。これらもよ又も添たる辭なればよろし。皆「なくの」な
かすをつめてたる也。さてこれらに「なくといひて。下になよもなどい
ふ辭を添たるを以ても。なくるとい
ふかよろしからぬとをささるべき也

十八ノ
十二

ほととぎすいとねたけくいたらばなの花ちる時にきなきとよ
む

これも上にぞのや何のてにをとなれば
ひると結べるとよろしからず

十一ノ
二十

めづらしき君を見んとぞひだり手の弓とる方のまゆねかきつれ
これの上にぞといひてつれと結べり。もしの禮の類字などの誤りに
あらざる歟。六帖にの二の句を。君見んとこそ直して入たり

十八ノ
廿四

長歌
うつせみの世の人我もこゝをまもわやにくすしみゆきかへる
年のとごとに天の原ふりさけ見つゝいひつきにすれ

十七ノ
五十一

これの上にこそといをせして。すれと留りたるいか。但し上に
まもといふ辭あり。此辭こそに通ふ例あり。五の巻五の部に出せり
なかとみのふとのりとごといひたらへわがふいのちもたがためおなれ
此結句のいかにいへるにか。この意も得がたし。上にたがといひてな
れと結べることいか。もしの「あれは汝かとも思へど。さにもあらじ。
猶よく考ふべき事也

二十ノ
四十五

はとゝぎすまづなく朝けいかにせば我門すぎかたなりつゝまで

これの上にいかにとあれば。過ぎらんとといをのかなりぬを。さのいひ
がたきまゝに。すぎじといへるいか也。これらにあらひて。てにをと
をみだりにすべきにあらず

二十ノ
十五

かしこきやみとかいふり明日ゆりやかへがひむたねをいむなしにして
此歌のやもじのむすび
なし。いか

十二ノ
十

うらぶれてかれにし袖を又まかは過にしこひやみだれこんかも
これと上にやといひて。又かもとむすべる
かなとす。戀のどこそあるべけれ

九ノ
十

河の瀬のたぎつを見れば玉もかもちりみだれたるこの川どかも
かくいひての。かも二つ重なり
たる。とゝのひがたし

十三ノ
廿九

長歌
草こそとりてかへかに水こそくみてかへかに云々
此「かへかに二つともは。飼早と書り。いと心得ず。早のさりめて誤字

なるべし。かにといひてにてにをはとゝのとす。もしり管、字の誤りにて。二つ共に「かひちめと訓べし歎。とまれかくまれ誤字あると疑ひなし。されどまばらく今の本のまゝに訓てこゝに、出せり

上の件おとせて二十首ある中に。字の誤れる。訓のあやまれる。又字のおちたるなどにやとればしき歌。又變格の例にのつれぬなど。これかれ十首ばかりあり。又すべてのうち六首の東歌也。然ればこれらをのぞきて。まさしくたがへる。たゞ八九首なり。猶集中をくりかへし尋ねば。今二三首などありもしなんか。そもく萬葉と。よき歌とてえり出たる集にもあらず。たゞきくにまたがひ見るにまたがひて。かきあつめたる集あるすら。四千五百餘首の中にとゝのとぬとつかにさばかりあらでいまじらぬをもて。古よりてにをはとゝのひと。おのづから定まり有つるをさとりつべし。

○同集の中にをは違へるに似て違へるにあらざる歌

二ノ十二 玉かづら花のみさきてならざるはたがこひにあらめわがこひ思ふを

三ノ四十一 見えすともたれこひざら山のとにいさよふ月をよそに見てしが

四ノ四十 明らかじめ人言まげしかくしわらばまゑやわがせこおくもいかにあらめ

七ノ四十一 わがせこそいつらゆかめとささ竹のそがひにねしく今し悔しも

十三ノ廿一 ときわたりつゝもわひかたらめ但し此めハ妻、字を書りもし

十四ノ十六 みちのくのわたゝら眞弓とじき置てせらしめさなばつら弦著かめ

同十五 未だの浦を朝こ舟とよしなしにこぐらめかもよなしこざるらめ

十六ノ三十 長歌 なにせんにわをめすらめや云うた人とわをめすらめやふえ

長歌 ふさどわをめすらめや琴ひさどわをめすらめや云う

一ノ十七 長歌 いかさまにおもほしけめか云う

三ノ五十四 長歌 いかさまに思ひけめかも云う

四ノ卅七 いかばかりねもひけめかも敷たへのまくらかたさういめに見えこし

件の歌ども。んらんけんといふべきところを。めらめけめといへる。たがへるに似たれども。集中にかくのどとく例おほく。又上に出せるごと

く。日本紀の歌にも見え。後の歌にもこれかれ例あり

四ノ 四十八 うまさけをみわのとふりがいとふ杉手ふれしつみ 君に逢がたき

二十ノ 五十九 うらめしく君ともある 宿の梅の散するまで見まめす有ける

七ノ 四十二 玉づさの妹と玉 かし引のきよき山へにまけばちりぬる

十ノ 五十七 秋の夜の月 君と雲がくりまばしも見ねばこゝたこひしき

これらのかかも。皆切れて。下へとかいりらざるに。猶かの格の結び
辭にてどぢめたる。違へるに似たれ共。集中に此格なほあまた見えたり

四ノ 卅九 わひ見すてけなぐなりぬ此ごろこ いか 好まやいふかしわきも

八ノ 三十 ふるさとのならしの間のほときすことつけやうし いか つけさや

十六ノ 九 なが 子ぞ ぞやおもひてあらん云々

十八ノ 卅四 なが しかも秋にしあらねばことひのともしきこら 云々

これらにいかになにに。下にやもじわれ共。いかにり二つ

とも切れたり。ながにぞにて切れたり。下へのかいりらす。何しかも
い「こらにて切れたり。こらぞといふ意也

十一ノ 三 いらのをにわれと思へど人めおほみ こそ 吹風にあらばまばく逢へき

ものを

十七ノ 三十二 長歌 關へへなるてあれ こそ よしあやし云々

これらにこそにて切れたる故に。
下にてにをにかいりらす

十一ノ 十八 きのふ見てけふ こそ あひだ わきもこがこゝとくつきて見まほしきも

十六ノ 十七 ところすばいかく こそ ある物 おさまろが家なるものとうものそにあらし

同 三十一 馬に こそ ふもどしかくもの 云々

これらのこそ。動かぬ言にて結ぶ格にて。切るゝ所
あるゆゑに。下にてにをはにかいりらす

十一ノ 四十一 わたのそおきをふめておふる藻のともいま こそ 戀のすべなき

同 四十六

かへらまに君こそわれにたくひれの白濱浪のよるときもなき

十二ノ 四

玉くしろまきぬる妹もあらばこそ夜の長きもうれしかるべき

十七ノ 四十四

野をひろみ草こそまげさ云々

十一ノ 廿七

なにそ人あし火たくやのすしたれどおのが妻こそとこめづらまき

これらのかそどかありて。さど結べり。此例日本紀にも二首ありて。上にあげたり。古へのひとつの格也。古今集よりこなたに此格なし

長うた

いにしへもまかにあれこそうつせみも妻をわらそふらしき

一ノ 十一

うべしこそ見る人ごどにかたりつぎまぬびけらしき

六ノ 四十七

こそに。らしけらしと結ぶつねの格也。又六の四十四のひら。十八の

廿八のひらなごに。こそとありて。けらしまご。もを添ても結べり。

然るに右にあぐる二首の。下にきを添たる。めづらしき格也。されどさ

と結ぶ例之。上に出せるが如し。又らしきといへる例の。推古紀の大御

十四ノ 廿三

ひらとけばとけなへひとのわがせなにあひよるとかよよるとけやする

これのかとやと重なりたれども。といのえずと聞えず。又どぢめの流字。一本にの家とあり。そのとさと解易さといふとなれば。やにてにを

十八ノ 三十一

ここの秋逢見しまいにけふ見ればれもやめづらしみやこがた人

此四の句の面彌めづらし也。やもじ

てにをはにのあらず

二ノ 三十二

なにかも此間六句よろしき君が朝宮をわすれ給ふや夕宮をそむき給

ふや此間廿句あぢさこふまごともたえぬ云々

これの「なにかもにて切れたり。さる故に下に何の結びなし。給ふや

のやへかけて見べからず。又下の「まごともたえぬのぬへもかへらず

十九ノ 廿八

なにかも此間十二句といゆもえず云々

これも同じく「何しかもにて切れたり。下の「えずのすへかけて見べ

からず

○右二首の「なにかも」。切れたる辭なれ共。切れざるがごとく聞え

て。さて下に其格の結び辭ひなくて。やといひ。又またといへるなど。よ
くせずばまされぬべし。今の世の人。長歌をよまんに。これらの歌共を
あしく心得て。てにをこそをみざりにするとなかれ。ねはよそ集中に長歌
二百六十餘首ある。いづれもてにをはたがふとなし。詞といくら長くつ
づきても。切れざるかぎり。上のてにをこそを守りて。切るゝ所にいた
りて。その定まりの結び辭をおくこと也

長歌

二ノ 四十

いかにさまに思ひをれか云々

長歌

三ノ 五十四

いかにさまに思ひけめかも云々

これらも上の「何しかも」と同じにて。かかかにて切れたり。さる故に
下にいかさまの結びことばなし

長歌の二つの格の詞

二ノ 二十

あまづたふ入日さしぬれ云々三ノ 五十五 夕やみどかくりましぬれ云々

三ノ 五十八

久かたのあめまらしぬれ云々五ノ 五 たちなびきこやしぬれ云々

五ノ 四十

玉きりるいのちたえぬれ云々九ノ 九 ともみかね過しやりつれ云々

十七ノ 廿七

いたづらに過しやりつれ云々十九ノ 十九 露霜の過ましにけれ云々

二ノ 三十四

大雪のみだれてきたれ云々十七ノ 四十六 かへり来てまのふれつれ云々

十八ノ 二十

こがねありとまうし給へれ云々同 廿七 かしこくものうし給へれ云々

十九ノ 十三

かたりつぎながらへきたれ云々

仲の歌をも。上にこそとかくらすして。れといひて切れたり。又

五ノ 三十一

遠ささかひにつかひされまかりいませ云々二十ノ 三十七 惜みつゝかなしびいませ云々

吉事記上
八千矛神

よばひにありかよひせ云々

これらも上にこそなくして。せといひて切たる。上のれと同じ格也。此れせの。皆長
歌のなかばに在て。事の他へ轉る際うつにいふ。一つの格にて。下へばなを加へて。ればせ
ばと見ればよく聞ゆる也。右に引る二の卅四のひらなる。「大雪のみだれてきたれを一
云」あらねすそちよりくればともあるにて心得べし。さて此格短歌にのたゝ一首あり。

三ノ 五十七 家さかりいまずぬぎもをどいみかね山がくり「つれ」たましひもなし
これなり。此歌もつればと。ばもじを加へて問ばよくきこゆ

○同集てにをはの訓を誤れる歌

集中にてにをはの字を略きて書る歌おほし。或之上をこぶき。或之下をこぶき。或之上下共に略き。又無と書るの「なし共」なきともよまれ。有と書るの「あり」あるあり。來と書るの「けり」ける「けれ」。いづれにもよまる。かくの如きたぐひと。すべて證としがたければ。今此書にあぐるとなし。但し今の本。すべての訓に誤りいとははけれ共。てにをはの訓に。大かた誤りすくなし。十六の卷廿四のひらなる「ば

すまなふたこれてたはこに居。此居の字。今の世の人ならば。必「を」と訓べきに。「を」と訓るの。中昔までもかゝる詞づかひ亂れさりし也。此歌上にどのや何の辭なければ。必「を」と留る格也。又十三の卷九のひら長歌に「まかれども吾者事上爲あめつちの云々。同卷十のひらなる長歌に「まかれども辭擧叙吾爲言幸云々。此二つの爲、字。一つの上のかゝりとなる故にすとよみ。一つの上のかゝりとなる故にすと訓り。かくのごとく同じさまなる爲字なれども。上のてにをはをこにまたがひてよめり。おほか

た皆此たぐひにて。集中に字を略けるところを。よみそへたる。その中にまれくによてにをはなども。大かたのよろしくして。誤れるのすくなし。み誤れるを。今左に引出て論ふ。

十五ノ 廿五 もみち葉の散なん山にやどりぬる君をまつらん人之かなしも

此結句の之字。のと訓るの誤なり。のなれば下を「かなしきとか。」「かなしきと」か結ぶ格あり。これの「かなしも」と結びたれば。之字しとよむべし

十六ノ 廿一 ぬば玉のひだの大黒見るごどにこせのに黒之れもはゆるかも

此之字がと訓り。それもあしからねど。猶しとよむべきなり。右の外にも之字まよむべきを。誤りてのと訓る歌これかれ有。なすらへて知へし

十七ノ 廿七 長歌 ぬば玉のひだの大黒見るごどにこせのに黒之れもはゆるかも

この數多成塗を「あまたになりぬ」と訓るのあやまりなり。上にとわれば。ぬとの結びがたし。ぬると結ぶ格なり。そのうへ塗字をぬとのみ

よまんともいかゞ。されば此句を「まねくなりぬると訓べき也。數多字
「まねく」とよむべきところ。此外にもおほくあるなり

七ノ 四十 ことさけばみきゆさけサメみなどよりへつかふ時にさくべきものか
これの上にてこそなれば。管字ナメなめと訓るひがと也
「なむとよむべし」

九ノ 三十二 長歌 ますらをのゆきのすいみにこゝにナレハ儂有コヤセルフシタル

此儂有ナレハ。上ののもじを。ゆきのすいみにといふへかくるときなり。ふし
たり共「こやせり共よむべし。もし上ののを「こゝに儂有といふ所へか
くるときなり。ふしたるときか「こやせるとか訓べし

十ノ 十二 もいしきの大宮人といとまわれや梅をのぎしてこゝにツギヘリ集有

これの上にてやとあれば。つぎへりと訓るひかならず。「つぎへると訓べ
し此歌のやもじの事。四の卷やの部れやの條にいへり

十二ノ 三ノ 山しろのいとたのもりにこゝろおそく手向したれば妹にカタシあひ難
此歌上にどのや何の辭なれば。難字「がたき」といよむべからず。

「がたし」とよむべし。但し四の句「たむけたれや歎

同 三十二 わさもこを夢に見えことやまどちのわたる瀬とにたむけワレ吾する

此歌上にどのや何の辭なれば。吾をわれとよみて。すると留りがた
し。然れば昔字「わがと訓べし。がの結び之のと同格なれば。すると留
れるにかなへり

十二ノ 三十八 みやこへ君といにしをたがとけかわがひものをのカタテ結手解毛

此結句を。板本に「むすびてとけもと訓るひ。いふにたらぬひがと也。
又一ゆふてたゆしもとも訓り。これのよろしけれ共。上のたがといへる
辭の結びにかならず。たゆしもと訓べし。四の卷五十一のひらあえんよ
のいつもあらんをなにするとかそのよひ逢てとの繁も。此歌も上ににど
ある故よ。まげきもと訓り。この歌もこれと同じ格あり

十九ノ 三十四 長歌 天地の神のなかれやうつくしきわがつまナレハ離流ナレハ云々

これの上やとあれば。となるくとこそ結ぶべけれ。となるにていかな
とず。「さかるとよむべし。奥に「なさけぞとといへる言もあれば必。さ
かるにてよろし

右のたぐひのよみ誤り。くとしくたづねば猶もありなん。みななすらへてさどるべし

○古風の辭

これハ萬葉集のうちに古今集よりこなたの歌にハ見えぬ辭また同じき辭も。つかひざまなどの古風なるかぎりをも。大かたにぬき出て。たぐひをわかち集めざるせり。されど此辭どもも。すべててにをこの本末のといひにいたりてハ。つねの定まりにことなるとなし。心をつくべし。此辭どもをあしく見て。今よまむ歌のてにををみだりにして。あやまるまなかれ。

し

- 一 さゝなみの國つみ神のうらさびてあれたるみやこ見ればかきしも
- 二 久かたのあめ見るごとくあふき見しみこの御門のあれまくをしも
- 六 ふるさとのあすかりあれど青によしならの飛鳥を見らくしよしも

- 七 わがせこそいづちゆかめとさき竹のそがひにねしく今しくやしも
- 八 秋たちていくかもあらねば此ねぬる朝けの風とたもとさむしも
- 二十 とふくすのたえずまのばん大君のめし野べにこまめゆふべしも
- 三 おく山のいと本すげを根ふかめてむすびし心わすれかねつも
- 同 ものゝふの八とうぢ川のあじろ木にいらよふ浪のゆくへまらずも
- 五 梅のとならまくをしみわか園の竹のとやしにうぐひすなくも
- 七 春がすみ井のゆた々に道ハあれど君に逢んとたもとほりくも
- 十五 朝びらきこぎでくればむこの浦の鹽干のかたにたづが聲すも
- 二十 はりえこえとほさ里までおくりける君がこゝろとわすらゆまも
- 同 あもとじも玉にもがもやいたゞきてみづらの中にあへまかまくも
- 十 野へ見ればなでしこの花咲にけりわがまつ秋ちかづくかしも
- 五 天地のとも久しくいひつげと此くしみたままかしけらしも

二 玉くしげみむろの山のさなかつらさねすばつひにありかてましも
 十一 きのふ見てけふこそあひだ二わきもこが一たくつぎて見まくほしき
 七 まどかたのみなどのす鳥浪たてや妻よびたてへにちかづくも
 四 あとんよいつもあらんを何すとかそのよひ逢てこのまげき
 十七 家にしてゆひてしひもをささけす思ふころをたれかまらんも
 十五 秋の夜を長みにあららんぞこ一ばいのねらえぬも「ひとりぬればも
 三 長歌まがことかわがさ一つるも「云々」
 十四 東路の手兒のよび坂こえがねて山にかねんも「やどりいなしに
 六 みかのとふらたいの野べを清みこそ大宮どころさだめけらしも
 右の歌どもいづれも。上のてにをはり。おのくその定まりのこどく結
 びて。その下へもを添たるもの也。もつてにをそのとりのひにりかゝり
 らすと知べし
 ○「もしも」まづも「すらも」うべも「いとくも」まとも「いまだも」こゝたくも

「とやも」あれをばも一かやうに添たるもも
 ○もを二つ重ねて添る例「今もかも」「けふもかも」「あすもかも」
 ○くも「もしくも」「けだしくも」「まましくも」
 ○とも

四 わが名「とも」千名のいは名にたちぬとも君が名たへばをしみこそなけ
 同 早川の瀬にをる鳥のよしをなみ思ひて有しわがこ一も「あられ
 五 長歌ひる「とも」なげかひくらしよる「とも」いさづきあかし云々
 十九 あめに「とも」いはつ綱とふ萬代に國去らさんといはつくなとふ
 二十 うらめしく君「とも」あるか宿の梅の散すぐるまで見しめず有ける
 又とぢめのとも

二 高ひかるわが日の御子の萬世に國去らさまし島のみやとも
 三 かくのみに有ける物を萩の花ささてありやとひしきみとり
 十 秋萩の花野のすいさはにといですわが戀わたるこもりづまとも